

(司会) 皆さん、こんにちは。東京都障害者福祉交流セミナーにご来場いただき、本当にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、東京都心身障害者福祉センター地域支援課の小林でございます。よろしくお願いいたします。

まず、本日のプログラムについて、ご案内させていただきます。

この後、主催者のあいさつに続きまして、東洋大学ライフデザイン学部、北野誠一教授より基調講演を賜ります。フロアからの質問を何件かお受けいたしまして、15分間の休憩に入りたいと思います。休憩の後、障害者の就労支援に実績を上げている世田谷区の取り組みを、保健福祉部障害者地域生活課の金澤弘道課長より行政報告をさせていただきます。おおむね4時15分ころには終了したいと考えておりますので、よろしくお願いいたしますと思います。

それでは、まず、開会に先立ちまして、東京都心身障害者福祉センター所長の中村憲司よりごあいさつを申し上げます。

中村所長、よろしくお願いいたします。

## 開会挨拶

### 中村憲司（東京都心身障害者福祉センター所長）

(中村) 皆様、こんにちは。本日はようこそ、こんなに多数の方においでいただきまして、ありがとうございます。東京都心身障害者福祉センターの中村と申します。開会に当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

この東京都障害者福祉交流セミナーは、年1回開催をしております。昨年までの3年間、高次能機能障害をテーマといたしました。ちょうど平成18年10月から、高次能機能障害支援普及事業が国の施策として開始されまして、東京都でも、私ども心身障害者福祉センターを東京都の支援拠点機関に位置づけまして事業を開始した時期でありました。その前年の平成17年から19年まで3年間、普及啓発の一環として福祉交流セミナーでも取り上げたものであります。おかげさまで、行政、福祉関係、医療保健、就労関係など、多数の機関の方々、民生・児童委員の方々など、毎回500人を超える多数のご参加をいただきました。

高次能機能障害については、昨年の12月に、国の障害者施策推進本部で決定をされました重点施策実施5カ年計画にも含まれまして、東京都でも引き続き、鋭意事業を推進しているところでございますが、今回の福祉交流セミナーは、障害者自立支援法、

また国の重点施策実施5カ年計画でも中心課題となっております。東京都でも、今、力を入れております障害者の地域生活支援、就労支援をテーマとして設定をいたしました。障害者自立支援法は、第1条の目的に、「障害者及び障害児が、その有する能力及び適性に応じ、自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう」途中飛ばしますけれども、「障害の有無にかかわらず、国民が相互に人格と個性を尊重し、安心して暮らすことのできる地域社会の実現に寄与することを目的とする」というふうに書かれてございます。障害者が東京のような大都市にあっても地域で当たり前に暮らしていけるよう、地域生活等の支援を拡充・整備していく仕組みをつくっていくことが、東京都初め行政の喫緊の課題となっております。

そこで、本年から3年間のシリーズで、都民の皆様方や障害福祉関係者などの方々に、支援の必要性及び地域生活を支える取り組みの課題と方向性をお伝えをしまして、障害があっても当たり前に地域で暮らすことの意味や障害を正しく理解する必要性を考えていただく、そういった内容で企画をいたしました。第1年目に当たります今年は、「大都市であたりまえの暮らしをめざす」というテーマで障害者本位の生活の意味の重さを再認識いただきまして、それぞれの持ち場での取り組みの課題を明らかにしてまいります。来年2年目は、地域生活を送る上で欠かせない安全ネットの構築や災害時における障害者支援に焦点を当てたいと思います。再来年の3年目は、誕生からのライフステージに沿った障害者の地域生活支援の取り組みのポイントや課題について深めていきたいと思います。

本日は、まず東洋大学ライフデザイン学部の北野誠一教授より、「都民として だれでも あたりまえの暮らし はたらき」と題する基調講演をお願いをさせていただきます。

北野先生は、障害者福祉に長く携われ、多くの自治体の地域福祉計画や障害福祉計画の策定委員長を務められ、現在、豊島区地域自立支援協議会委員でもあられます。また、障害者の地域生活移行等に高い見識をお持ちでございまして、障害者自立支援法の理念の実現についての多くの提言をなされ、サンフランシスコ州立大学での研究留学の経験から、欧米の障害者福祉の研究もされていらっしゃいます。

次に、世田谷区保健福祉部障害者地域生活課の金澤弘道課長より、「働く喜びを！ 世田谷区のとくみ」と題してお話をいただきます。世田谷区は、ご案内のとおり、80万人以上の人口を擁しますけ

れども、住民参加型の街づくりを進める先進自治体でありまして、障害者福祉・支援にも力を注いでいます。本日は、障害者の就労支援に成果を上げているここ数年の仕組みづくりの実践をお話しいただきたいと思っております。最後まで、ご清聴いただければと存じます。

本日は、ご来場ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 中村所長、ありがとうございました。

それでは、これよりプログラムに沿って進めさせていただきます。

「都民として だれでも あたりまえのくらはたらき」と題しまして、東洋大学ライフデザイン学部の北野誠一教授より基調講演を賜りたいと思います。

ご講演に先立ち、北野誠一先生のご略歴をご紹介します。

お手元の、この資料の3ページをお開けいただけますでしょうか。北野先生は、1983年に大阪市立大学大学院博士課程を修められ、長く桃山学院大学でご教鞭をとられ、2005年に東洋大学に着任されております。多くの研究業績と、特筆すべきは自治体での障害者福祉関連の計画に携わっておられます。本日のお話の中で、障害者の地域生活を進めるためのキーワード、エンパワーメント、シンパシー、コミュニティーインボルブメントなどの言葉がちりばめられています。

それでは、北野誠一教授、よろしくお願いいたします。

## 基調講演

「都民として だれでもあたりまえのくらはたらき」

北野誠一（東洋大学ライフデザイン学部  
教授）

(北野) 皆さんこんにちは。

実は私は、一応住んでいるところは、今は東京の、言うとならば笑われそうなんですけれども銀座に住んでおりまして、銀座一丁目に住んでいます。住んでいる理由は、大阪の人間でありまして、大阪と東京を行ったり来たりしているものですから、東京駅のそばに住もうと思って、東京駅から歩いて15分以内のところで1キロの範囲でぐるっと円を描いたら、ちょうど銀座一丁目というところが、いわゆるワンルームマンション街でありまして、いわゆる

我々みたいな人間とかが、行ったり来たりする人間が住んでいるワンルームマンションが林立しておりまして、そこで今、寝泊まりだけ、ほとんど東京都内では寝泊まりだけの生活でありまして、ふだんは有楽町線で、埼玉県の朝霞市にあります、この東洋大学のライフデザイン学部というところで教鞭をとって、もう3年半たちました。

それまでは、大阪暮らしの大阪育ちでありまして、大学も大阪、職場も大阪。ですから、今はまだ一生懸命緊張していますから大阪弁がまだましなんですけれども、話し出しますと、もうひどい大阪弁で、学生の中には、前の方に座っている学生が、一生懸命聞いているような学生が何人かおりまして、「おまえ、おれの話はおもしろいか」と言ったら、学生が、「先生の話はわからないけれども、大阪弁がおもしろいから来てんねん」と、大阪弁を聞きに来ている学生が何人か前の方に座っているという、私の話はほとんどちゃんと聞いてないという感じなんですけれども。でも、結構大阪弁を楽しんでもらっているみたいなんですけれども。

きょうは、このタイトルを、私、このタイトルを考えてからすごく悩んでしましまして、まず「都民として だれでも」と書きましたけれども、こんなタイトルを書いたら悩みますよね。都民というのは、どこまでの人を都民というのかと。例えば、都外から働きに来ている方は都民としてというイメージとしてぴったりなんでしょうけれども、「だれでも」ですから。あと旅行者の方はどうするかとか、あるいは、やはり、いわゆる不法入国されている方はどう扱うのかとか、「だれでも」という概念をつくりますと、私たちは結構、どこまでの人をこの範囲に含めるのかというのは、結構考えてしまうと、すごく難しいテーマなんです。

あと、「あたりまえのくらし」というのも、書いてから、何と難しいことを書いてしまったなと思って、「あたりまえのくらし」というのは、実は簡単そうすごく難しいです。当たり前って、では何なのかと。どこまでを当たり前と言うのかというふうに考えますと、これもなかなか難しいタイトルで、あっさりと言いましたが、結構難しいことを書いてしまったなと思って。

それととっても難しいのは、「はたらき」というのはもっと難しいです。一体どこまでを「はたらき」と言うのかです。例えば「はたらき」と書いたときに、必ず最初に、女性問題をやっている方から、専業主婦の方は、では、「はたらき」というのをどうとらえるのかとかいうのは出ます。あるいは勉強し

ている、学んでいる人は、「はたらき」というのは、一般就労していないけれども「はたらき」と言うのかとか、あるいはパートの方はどうであるのかとか、あるいは就労支援を受けている方はどうかとか、作業所に行っている方はどうかとか、「はたらき」という言葉を使っても、かなり、これ、どこまで、人間の何を「はたらき」と言うのかと考えますと、すごく結構難しいです。ですから、簡単に書きましたけれども、このタイトルは、実はなかなか難しい問題をいっぱいはらんでいるんだということを、少しだけ最初にご理解していただけたらというふうに思います。

それから、今言ったように、東洋大学のライフデザイン学部というのは新しくできた学部でありまして、私はずっと大阪の人間でしたけれど、新しくできたものですから、この大学に初めて、大阪を出て、こんなところで暮らしたり、教諭をしたりしているんですけれども、もちろん来た理由はありまして、東洋大学のライフデザイン学部の学部長というのは、古川孝順という、我々の世界では超有名人でして、これは社会福祉学会の会長とかをされている方で、先生に呼ばれたら断れなかったというのもあるんです。

実際に来てみて、初めて東京で生活して、いろいろなことを思いました。ぶっちゃけて言いますと、まず東京はアクセスが悪い。本当に、これ、障害を持っている方がどういう生活をされているのかということについて、すごく私は心配しました。東京都の、例えば地下鉄ですけれど、エレベーターがついている率が大阪と比べればはるかに低いと思います。ですから、やはり東京都というのは、早くから拓けた街ですから、当然、恐らくエレベーターがつく前に地下鉄網が発達してしまったのでしょう。ですから、エレベーターがない地下鉄が、まだかなり駅がありますよね。ああいう駅の場合に、車いすの障害者の方がどうしてらっしゃるのかなと思ったら、エスカルになっている、ガタガタガタと上がるのとかを使ったりとか。大阪は、実はエレベーターが、もう9割近くつきましたから、ほとんどの駅はエレベーターで自由に、全くバリアフリーに近い状況になりましたので、大阪に住んでいる車いす障害者は、もう自由に街を闊歩できる状況に今なってきていますけれど、まだ東京は、その部分は少しおくらしているなと思いますか。これは、東京の障害者の方、今いらっしゃると思いますが、障害者運動の違いもあるような気がします。

大阪は、とにかく障害者運動というのが、当事者

運動が盛んといいますか、非常に活発な地域でして、私は大阪市の障害者計画の委員長とかやりましたけれども、これはもう大変なんです。当事者の方が強いから、意見がばんばん出てくるんです。だからもう、当事者の人たちに突き上げられて、大阪市の行政との間に立って、行政から、「先生、もうそれ以上はできません。何とか障害者の方々に、もう少し、ここまでぐらいと言ってください。」と言われて、障害者の方から、「北野さん、何を言ってんねん、もっとやらせんかい」という、間に立って、もうえらいことだと、大阪の委員長なんて名前はかっこいいけれど、えらいこっちゃなというくらい、やはり大阪というのは、そういう当事者の方がすごく活発に意見をおっしゃられたり活動されて、行政の方が、いつもそれに押されながら物事をやっているという感じなんです。東京というのは、私は練馬区の障害者計画の委員長もさせていただきましたし、あと、豊島区の自立支援協議会の副委員長もしていますから、思いますと、スマートはスマートなんですけれども、やはり行政がある種の主導をしているといえますか、行政の方が、やはり最初に出てこられて、ある種の行政主導というのが、何かやはり確立しています、雰囲気的に。行政の方が話されて、障害者の方や、あとサービス提供機関の方々が、最初の話しを受けながら、いろいろな意見をおっしゃられて、そしてナゴシエーションをしながら物事が決まっていくという雰囲気が、何となく、関西とは随分雰囲気が違うなど。関西は、あんなふうに、だから物事はなかなかおさまらないなという気がしています。

これは、いい面と悪い面が両方ともあるような気がします。どちらがどっちと言いませんけれど、ただ、これからお話する地域自立生活支援であるとか、あるいはエンパワーメントというような概念は、どちらかといいますと、当事者ご本人であるとかご家族であるとかが非常に中心になって物事を進めていったり、地域で当たり前に暮らしていく、その仕組みをつくっていくわけですから、当然、当事者の方々の意見であるとか思いであるとか、そういうものが非常にメインといいますか、中心として浮かび上がってくるということでありますから、これは私が大阪にいて、大阪でずっと研究者として当事者と一緒にやってきたから、ある意味でこういう概念は非常に作りやすかったし、形成しやすかったのではないかなというふうに感じています。関東に来て、ある意味でいろいろなところでお話させてもらって、関東のいろいろなやり方とか、ああいうことは聞きながら、なかなかなじめない部分もあったり、ちょ

っと我々とは違うなと思ったりしながら、でも、やはり東京都というのは、ほかとは全く違うところだと思ってもらっていいです。

私は、いろいろなところで講演したり、全国のいろいろなところで、滋賀県とか三重県の障害者計画の委員長もしていますから、関西の方はいろいろなエリアでいろいろな委員長をしてわかったことと、この関東、東京都のつき合いでわかったのは、東京都は、よくも悪しくも違う財政基盤を持っています。ですから、東京の持っている財政基盤というのは、ほかの都道府県とは全く違うと思ってもらっていいと思います。はっきり言うと、障害者運動は、住民がもう少し活発に大きな声を出して闘いといえば、東京都はまだまだやれるだけの金も持っているし力もあるということです。だから、今のレベルで終わっているのはもったいないといえますか、もっともっといろいろなことができていい地域であるし、もっといろいろなことができる、やはり、ほかとは全く違う財政力を持っていますというの、私は、いろいろなところで本当にやっていますから、本当に、本当にそうなんです。もちろん、そう言ったら、いやうちの区だって金は苦しいとか、東京都だって財政は今非常に困難になっているとかとおっしゃいますけれど、それはほかの都道府県、市町村とはレベルが違います、その苦しさは。東京都は、だから私は、これからまだまだやれることはあるし、やれる力もあるし、皆さんが、やはり市民の方、住民の方々、きょうは民生委員さんの方々とか、あるいは当事者の方、あるいは家族の方々、あるいは職員、東京の職員の方やサービス提供機関の方、来られていますから言いますが、あなた方が団結されて大きな力を持たれて、きっちり闘いとしていかれたら、東京にはまだまだやれることもあるし、可能性もあるし、それだけの財力と、それと行政の方々も、やはりレベル高いですからね。皆さんがアイデアを出し、東京都の職員の方々がアイデアを出されたら、私は、まだまだ、ここはすごく大きな可能性を秘めていると思います。それを、少し最初にお話をしておきます。

きょうは、私は、実は私の専門は二つありまして、一つは、いわゆる地域自立生活支援という、地域の自立生活、地域で普通に暮らしていくという、どんな重い障害を持っている方もですよ、どんな重い障害を持っている方も地域で普通に暮らしていくというのが、私のやってきた、これまでの研究と実践でありますので、その話をいたします。それからもう一つ私の専門は、いわゆる人権問題というのが私の

専門でありまして、エンパワーメントとかエンパワースタッフという話をいたします。この二つは私の専門でして、福祉の辞典で、今一番大きい辞典というのは、エンサイクロペディアという辞典が出ていますが、私が書かせてもらった項目は、この二つでありまして、地域自立生活支援という項目とエンパワーメントという二つの項目を私が担当しましたので、この二つは私の皆さんにお話できる唯一のテーマでして、それ以外のことについては、私はそれほど専門性もありませんし、お話しできるというようなこともないんですけれども、この二つについては少しお話しできることがあるかなというふうに思っています。きょうは、まず、私たちの原点、つまり地域で当たり前に暮らすことを支援していくというお話をしていこうかなと思っています。

地域自立生活支援の定義といいますが、一応定義らしきものといいますが、こんなことなんですよということを最初に書いてありますので、これは、最初に書いてある文章。この最初のこれですね、この最初のものと二つ目は、実は矛盾してしまっていて、こっちに書いてあることとこっちに書いてあることが、ちょっと違うというのは、後で理解してもらえと思うんですけれども、実は、ちょっとフェイントといいますが、若干皆様に考えていただくことをはらんでいます。

最初申しますね。地域で自立生活をするとか、その支援をするということは、支援が要っても要らなくても、可能な限りご本人の希望する普通の家庭生活であるとか社会生活、例えば、ずっと一学生び続けたり、あるいは社会的に意味のある働きをしたり、楽しい余暇を送ったり、あるいは自分の政治活動をしたり、あるいは自分なりの宗教活動をしたり、あるいは近隣とのいろいろな交流とかボランティア活動とかをすること、そういうことを、自分が一生の間にこんなふうに生きてみたい、やってみたいということが、自分らしく主体的に展開できることが、これが地域自立生活であって、それを応援するのが地域自立生活支援と言うというふうに定義をしています。ですから、ここは、これも本当に簡単そうに見えるけれど、実はここは説明すると、これだけで何時間かかるぐらい難しいテーマをはらんでいます。

一つは、皆さんがこれを書いたら、まず最初にちょっと違和感を感じられるのがあると思うんです。どんな重い障害を持っている方も、例えば政治活動ができるのかとか、どんな重い障害を持っている方も宗教活動ができるのかという、まずそんな議論になるわけです。ここは、例えば、余り難しく考えて

いただきたくないんですけれども、政治的活動なんていう話をすると、そもそも、これ、こういう市民的な活動を話するときに、北野さんは政治の話を、こういう一般的な市民的な市民活動のところで話をされるのですかということで、余り政治的な問題とか政治活動なんていうことは触れてはいけないというようによく言われることがあるんです。でも私は、そんなことを言っている国は、この国、日本だけだと思います。世界じゅうのどの国でも、小学校1年生のテキストから、国民が自分の政治的な活動をして、市民として政治活動にかかわるのは市民の義務であるというのは、どの国でも一番民主主義の国が大事にしていることです。小学校1年の教科書から、やはり、スウェーデンでもデンマークでもアメリカでも、この政治にかかわる、市民が政治に責任、つまりさまざまな政治的な活動にかかわり、ちゃんと正しい政治を行わせ、チェックすることは、市民の義務であるというのは、これは本当に大切なことなんです。

障害者問題なんていうのは、実は政治なんです。政治を抜きに障害者問題なんてないのです。きれいごとを言っても仕方がないと思います。つまり、障害者問題というのは、どれだけのお金と物の考え方が障害者の支援に使われるかということがとても大きいんですよね。だって、障害者の方が地域で当たり前前に生きるためには、さまざまな支援、お金もかかるし社会の理解も要るし、そのことを皆がそれに関心を持ってもらえなかったら、障害者問題なんて展開しないではないですか。そのときに、政治を抜きに、お金の問題とか、政治的な意識を抜きに障害者問題なんて語れっこんなてないなんていうのは、どの国だって、そういう議論を当たり前前にできているのに、この国は、どうもきれいごとなんですよね。政治的な問題を抜きに障害者問題を語ろうとする。でも、それはあり得ないです。

例えば、私はアメリカに、もう1年以上いて、毎年アメリカに行っていますけれど、例えばアメリカで、カリフォルニア州で毎年定点観測していますけれども、それはもう、障害者の集会とか活動とか、いろいろなところに行ったら、もうそういう議論はがんがん出てくるんです。今度選挙するときに、だれが私たちのためにちゃんと活動する議員なのか、どの党が私たちのためにお金を出してくれるのか、どの党は福祉の予算を切ろうとしているのか、どの党は教育について冷たいのか。それはそうです。教育や福祉に冷たい、本当に支援していない人が政治をしたら、当然障害者の支援はお金が来ないです。

一方で、やはり、福祉や障害者問題に、教育の問題に熱心に考えていらっしゃる人たちが政治をすれば、当然その人たちは必要な配慮とお金とシステムと意識を、この社会に生み出します。ですから、そういうことを、やはりはっきり物事は語っていかなければ、世の中変わらないんですよ。

ですから、アメリカでは知的障害の方も、実は政治運動されます。なぜかと言うと、小さいころから、この知的障害者のエンパワーメントということの中で、当然、本人が自分らしく力をつけて生きていくときに、自分たちのためにちゃんと動いてくれる政治家はだれかとか、ちゃんとしない人をちゃんとリコールしてやめさせてしまうとかということとは、とても大事な、自分たちの生きることにとってとても大事なことです。ですから、例えば県会議員さんとか市会議員さんというのは、多くのボランティア活動を支援していますけれども、自分たちのボランティア活動の中には、ちゃんと知的障害者の方が自分たちの議員さんの活動をやってくれるときに、その活動をボランティアしてもらうチームなんていうのは、大体民主党系の議員さんとかは、皆持っているわけです。なぜかと言ったら、その人たちが、小さいころから政治に関心を持ってボランティア活動をしているうちに、議員さんの手伝いとかをしているうちに、この議員は僕たちのためにこんなことをしてくれているんだな、あの議員は僕たちのために何もしないんだな、では、やはり、この議員に1票を入れようというようになる。

日本は、知的障害者に選挙権をとく、知的障害者の選挙権を生かそうなんて言っているけれど、彼らは選択なんかできないですよ。だれが僕らのためにやってくれているのかと、知らない人に選挙権と言ったって、親に言われて、あなた、こう書くんだよと言われてたり、施設の中で、施設の理事長が、理事か何かが議員さんの関係者で、こんなふう書いて1票入れておいてと言われて、無理やり書かされるのが落ちですよ。そんなもの、人権侵害です。本人がちゃんと自分で確かめて、いろいろな活動をして、学んで、この議員さん、僕たちのために何かしてくれている、こんなこともしている、あの議員さん、呼びに行っても講演もしてくれないし手伝いもしてくれない。やはり、この議員さんは僕たちのためにちゃんと支援してくれているんだな。ではこの人に1票を入れようかと。あの人はちゃんとしてないから落としてしまおうと、リコールしてしまえと、そうでしょう。そういうふうに物事をちゃんと考えていけなかったら、日本の民主主義も進まないし、障

害者の支援も、障害者の本当の意味での権利も生まれてこないです。障害者の方は政治活動は大事ですよ。本当に。

しかも、その議員さんに、選挙の日に1票を入れていくだけではないです。やはりボランティア活動をしたり、政治家さんがやっているときに、ちゃんと公聴会を聞きに行ったり、議会の傍聴に行ったりして、あんないいかげんな人、やめさせてしまえと、あんな人、我々のために何もしてないじゃないかと、あの議員は障害者のために何をしているんだと、あんな人、だめだよ。そうなったら、一人でもそういうことになったら、もう議員さんは皆変わるんですよ、目の色が。あ、やばいと。あんな目に遭った議員がいると。じゃあ、僕もちゃんとしなかったら、障害者のために、地域の住民のためにちゃんとしなかったら危ないと、次の選挙に勝てないとなったら、もう議員さんは皆目の色が変わってきます。真剣に福祉のために、真剣に地域のために、だれか一部の人間のために動かなくて、住民のためにちゃんと動きますよ。そういうふうにしていかなかったら、世の中というのは変わらないです。そこが、この書いている政治的活動ということです。

あるいは宗教的活動と書いたら、また、これも、先生、宗教的活動というのは、そんな一部の方がやっている活動のことを余り強調されるのはいかがなものかと、またこうくるわけです。確かに日本ではそうなんです。一部の方が宗教的な、ある種の宗教に入られて、自分たちのためにいろいろなことをされている、仲間のためにされている。でも、これは、やはりこの国の特色です。他の国、例えばアメリカに行って、イギリスに行って、あるいは私はスウェーデン、デンマーク、カナダに行って思いますけれども、キリスト教徒の強い国は、大体クリスチャンが8割とか9割とかいらっしゃいます。そうすると、その国々は、キリスト教に入っているのは、自分のためもあるけれども、基本的に社会奉仕活動なんです、あの宗教は。つまり、自分より困っている方にどんな支援をするかというのが、彼らの宗教活動です。ですから、自分のために、私のために、私を何とかして、私を助けて、私をという思いだけではなくて、地域の本当に自分より困っている方のために何ができるか、どんなことをしていくのかというのが、基本的に宗教活動です。だから、地域の住民、近隣活動と重なってきます。だから、ボーイスカウト活動、ガールスカウト活動含めて、あるいは子どもたちの子ども会活動も含めて、地域の住民のために、自分の子どもも含めてです、もちろん、きれい

ごとではないから、自分のためであるし、自分の子どものためだし、自分のおじいちゃん、おばあちゃんのためだし、そして隣のおじいちゃん、おばあちゃんのためだし、近所の人のためだし。つまり、何と言うか、地域のために、地域の人たちのために何ができるのかということがちゃんと考えられていなかったら、いろいろなものは生まれてこないんです。

ですから、今後、やはり私たちが求められているのは、これから普通に生きていくということは、普通の家庭生活とか、普通に障害を持っている方も持っていない方も、家族となり、親となり、子を持ち、おじいちゃんになり、おばあちゃんになりという、そしてそういういろいろな家庭生活の中での人間関係をどう生きるかということと、あと社会生活、どんなふうに、これから、いろいろな自分なりに学んでいくのか。そして自分なりにどんなふうに働いていくのか。これは一般就労だけではありません。60歳や65歳を超えて、社会の中でどんなふうに自分の仕事を生かしていくのか。それから、どんなふうに自分の人生をエンjoyしていくのか、余暇活動をどうしていくのか、そして今言った政治的な活動とか、あるいは宗教的な活動とか、あるいは地域で地域の住民として何ができるのか。

資料に、書きましたけれども、「支援がいつでも要らなくても」と書いたのは、実はこれほうそなんです。支援の要らない人間なんていないんです。支援が要らない人間はいません、この世の中には。人間は、すべて支援が要るんです。助け、助けられて生きています。嫁さんに助けてもらっていないんだながいたら、私は顔を見たいです。その男が、おれは自分ですべてやっているんだと、嫁さんはいるだけだと。ふざけるなよと。みんな、奥さんもだんなを助け、子どもと助け合い、人間というのは助け、助けられて生きているんです。どんな人間も、支援の要らない、助けの要らない人間というのは、あり得ません。ないんです。ですから、ここに書いてある「支援がいつでも要らなくても」というのは、実はうそでして、実際には、地域自立生活支援というのは、後で見ますけれども、三つの構成要素からできていますし、支援の要らない市民というのはありません。すべての人間は、支援が必要です。

ここで、一番難しい問題は、ひとり暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんが、どんどんふえます。ひとり暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんは、一番支援が得にくい方です。つまり、すぐに周りに相談できる人がいない。この支援の、ひとり暮らしのおじいちゃん、おばあちゃんたちが、実は一番、今、

悪徳商法や、いろいろなもののカモになっています。なぜかという、本人は自分一人で生きてらっしゃいますから、当然自信もあるし自負もある。自分一人で頑張っている、自分で判断もできている。そこがみそなんです。そこが一番危ないんです。自分でやれると思っているのが、一番相手がつけ込みやすいところなんです。だから、向こうはもうプロだから、振り込め詐欺の連中の手口とか、それから悪徳商法の連中の、例えば、かくしゃくとされている元気そうなおばあちゃんがいらっしゃる。「おばあさん、おきれいですね、本当にお元気そうに。何でもしていらっしゃるんですね、すごいですね。そこまでおできになるんですね。ちょっとこれを飲まれたら、もっとお美しく。ちょっとこれを使われたら、もっと元気になれますよ」それは向こうはプロだから、相手が一番喜ぶ言葉と一番乗りやすい、「そう、私、そんなにきれい？ 元気？ そうそう、それもできるのよ。それだったら、もっとおもしろいことができそうね。じゃあ、ちょっとそれ……」そこまではまったら、もうあとはずるずるずるずるいろいろなものが来る。だから、一人で判断をする状況に追い込まれるということは、実は人間にとって一番恐ろしい厳しい状況なんです。周りに娘、息子がいたり、だんながいたりしたら、「おまえ、何を言うてんねん、そないしわくちゃん顔、きれいと言っているの、それはおまえ、売りつけるための言葉とちゃうんかい」と。「これ、本当に効くのかどうか、一度友達に聞いてみたるわ」と言ったら、この成分、こんなもの効かないと、これ、別にこんなもの10円や20円のもんだ、なぜ1万円、2万円もしているんだと、すぐでしょう。でも、それは、そうでないと、周りにいるから相談できるので、そして相談しながら人間は物事を判断できるんです。

例えば、私なんかでも、こうして今、ひとり暮らしをしているけれども、1万円以上のものを買うときは、嫁さんに相談しないと後で大変だもんね。嫁さんにしかられたらいけないというのものもあるけれど、やはり、どじなものを買ってしまう。一人でいたら、気が大きくなってしまって、ついつい要らないものを買って、後で困るわけ。ちゃんと嫁さんに、「こんなものを買っていいか」と言ったら、嫁さんが、ちょっと娘に相談してみてもか言うわけ。あるものは娘がよく知っている、あるものは息子がよく知っている。パソコンの関係とか機器とかというのは、全部私は伊三君という、私の教え子が仕切っているわけ。だから、私のワンルームマンションに来たこ

とがあるのは、嫁さんと、その伊三君だけでして、セッティングとか、全部彼がやってくれるんです。だから、自分は判断して生きているつもりでも、ほとんどいろいろなものは、全部相談したり支援があって、ひとり暮らしの私が成り立っているんです。支援や何かがなくて生きていけるなんて、それはうそですよ、そんなもの。だから、人間というのはみんな助けられて、まず生きているんだということを素直に認めていかないと、次の話が始まらない。

大事なことは、人間が本当に人間らしく自立して生きていくためには、まず、私たちはみんな助けられて生きているんだと、支援を受けて生きているんだということを素直に認めるのが一番なんです、まず。ここがないと、おれは何でも自分でできるんだと、おれは強い。弱い人、かわいそうな障害者がいたら、おれはそのかわいそうな障害者を支援してあげるんだと、ボランティアをしてあげます。こういう人が、実は一番困るんです。自分のことがわかっていない。人の高みに立って、おれはしてあげる人、このかわいそうな人に、何か、おれはしてあげるんだと。だから、もう、初めから格差がある、そこに。おれはしてあげる人、おれは強いから、この人弱い人、してあげる人、される人。そういう意識の中で市民の助け合いが生まれてくると、初めから格差なんです。格差社会なんです。もう全くうつつうしい、そういう人はやってほしくない、一番困る人がそういう人なんです、傲慢な。自分が正しいと思ってしまっているし、全然自分の考え方を変えないし、でも、助けてもらっていると、自分は、そもそも支援が必要な人間であるということを初めに理解して下さっている人は、お互いに助け合って生きていこうねと思っ

ていらっしゃるから、これは私がしてあげるよ、でもこれをしてね、ありがとう、させてもらってありがとう、でも、してもらってありがとうという、そここのところが、もうツーとカーでわかるんです。つまり、同じ人間として生きていけることがわかるんです。

ここがきょうの話の一番大事なところで、今からこのことを一緒に考えますけれども、このことがわからないと一緒に生きていけない。すごく疲れる、つまり自分だけ一所懸命突っ張って、おれはやる、おれは支援は要らない、おれはやれると思っ

か。ここが習得できるかできないかで、人間というのは、ともに生きていけるかどうかという、ここが、支援を受けている人間の気持ちがわかる、支援をされている人の気持ちがわかるかどうかというのが、もうこの福祉の勝負なんです。支援する人間の気持ちだけわかる人間ではだめなので、支援されている人がどんな気持ちであるかということがわかるかどうかというのが、これがもう、この福祉の世界の、ある意味で一番大事なところですよ。

地域の自立生活支援というのは、きょうは、最初に三つあると言ったよね。三つの構成要素からできています。三つなんです。

地域自立生活支援ですから、当然、ごろ合わせではないけれど三つありまして、一つは自立生活支援と。これは私たちが、身体障害者の、アメリカの自立生活運動、ジュディー・ヒューマンとか、マイケル・ウィンターさんとか、メドロバさんとか、いろいろな方から学んできたり、あるいは日本の自立生活運動のいろいろな方々から学んできたり、実は私は、今こうしていい格好を言っているけれども、初め、これわからなくて、自立生活をしているアメリカに勉強に行って、結構、ジュディー・ヒューマンとか、いろいろな方から、おまえは全然物がわかっていないと言われて、かなり厳しく指摘されたり、日本の障害者運動の方から、かなり頭をたたかれながら、やっとこういう物事が理解できるようになったということがありまして、結構自立生活というのは、簡単そうですけれども、自立生活を支援することは、学んでいかなければわからないところが多いんですよ、実践で。

二つ目は、地域生活支援。これはわかるよね。地域生活の支援ですから、どんな重い障害を持っている方も地域で暮らすことを支援することなんですけれども、私は、西宮の青葉園という重症心身障害の方の地域生活支援をずっとやってきましたので、本当に重症心身障害の方がアパートなり地域と一緒に仲間と暮らしたりするということを支援しながら、現場で、どんなに重い障害を持っている方も地域生活は可能であるということは、実際に現場で実践を見てきましたので、ある意味で自信を持って言えるんですけれど。こういう話をすると、医療の必要な方が本当に地域で暮らせるのかという議論が出てきます。確かにその議論は正しいところもあるんですよ。なぜかという、やはり日本は地域医療がおくれているから、地域で医療のシステムがないと、やはり重い、気管切開されていたり、胃ろうをされている方なんかの場合、やはりどうしても呼吸器の

問題、いろいろな問題で、緊急の支援の問題とか出ますので、やはり地域の医療の問題は大きいんです。しかし、その問題を徐々に支援する方々を確立していきますと、どんな重い障害を持っている方も地域で暮らせるということは、実は実践的には可能ですし、実際にされている地域は幾つか出てきています。その一つが、今言った兵庫県の西宮のところですよ。

それから、きょう、一番お話ししたいのは、この3番なんです。地域支援。わかりますか。地域自立生活支援は、自立生活支援と地域生活支援だけではないという、地域が変わらなければいけないと、地域を支援しなければいけない。つまり、地域の住民の方々と私たちと、あるいは私たち住民が、地域とともに生きるという、助けたり助けられたりするということを、つまり共感するといえますか、人の、相手のことを共感できるという、そういうことの力を高めなければ、この仕組みは、実は確立しません。ですから、三つが三つともそれなりにでき上がってきて、この地域で当たり前で生きるということが、実は可能になります。三つは、三つともとても大事ですので、少し一緒に見てみます。

この三つが、三つの要素が紡ぎ出してきて、この地域を育てていると、エンパワーメント、後で出ますけれど、エンパワーメントされた地域を育てていきます。これは、今はやりのインクルージョンと、今、インクルージョン社会とか、インクルーシブソサエティーという、インクルージョン社会という言葉が結構ちまたでは出ていますけれども、私は、この、要するに一人一人の市民がエンパワーメントされた、そして地域の住民がエンパワーメントされた地域の姿であるというふうに思っています。

そうすると、これは実は、ちょっと説明が難しいので、三つのそれぞれについて、これまた最後に見てみます。

あと、これは西宮の図なんですけれども、西宮の、きょうはお話をたっぷりできたら、この図を使ったり、ほかの図を使ったりして、西宮でどういう、インクルージョン社会・西宮というものをつくるために、今どんなふうにもいろいろな活動・運動が生まれているかということをやっくお話をしたいんですけども、これは、時間があれば、また後で戻ってこれたらと思っています。

きょうは、最初に少し、三つの構成要素のお話をします。これは、自立支援法という、皆さん、もしきょうは現場で働いている、福祉労働されている職員の方も来ていらっしゃるやいまして、それとあと行政の方もいらっしゃるやいまして、障害当事者の方も

いらっしゃるようですから、障害者自立支援法という非常に問題の多い法律の中で、当事者も家族も支援者も、非常に行政もしんどい状況だと思います。

皆さんも知っていらっしゃるように、障害者自立支援法というのは三つの要素からできてまして、給付は三つの給付がありまして、一つが介護給付。二つ目が訓練等給付という名前でありまして、もう一つ、市町村がやる、いわゆる地域活動支援事業ですね、地域活動支援の、この部分があります。この地域支援事業の中に、私は、国はここのところをやはり不明確にしたなと思いますけれども、地域支援事業というのは、どちらかというと個別給付になじまない、個別給付ではなくて、地域が住民と障害当事者が、お互いに地域でともに生きていくために、さまざまな共感力を養ったり、地域で生きるためのいろいろなことをしていく、そういう事業として展開されるべきであって、例えば視覚障害者と知的障害者のガイドヘルプなんていうのは、あんなものは明らかに個別給付ですから、介護給付に持っていくべきであって、介護給付と地域活動支援をごちゃごちゃにしている今の自立支援法というのは、とても見るにたえない、整合性の全くない仕組みです。だから、やはり個別給付は個別給付に、そして障害者の就労支援と自立支援のためのプログラムは、ちゃんと自立支援、訓練等給付に、そして地域を変えるためのプログラムは地域支援事業の中で、それぞれもっとちゃんと論理整合的にされて、きっちりされたら、私の言っている三つの活動とも、ちゃんと論理的に整合性がとれると思うけれど、今の自立支援法というのは、非常に問題も矛盾も多過ぎます。整理ができていない。つまり、金の問題だけでやったから。やはり、悲しいのは、今もこの国は、金のことだけで物事を進めようとする。しかし、私たち、障害者を支援している、あるいは障害者とともに生きていく人間は、やはり、金も大事だけれど、ともに生きていくために一番大事な、どんな重い障害を持っている方も地域で暮らしたいと思っている方は、みんな地域で暮らすためにどうしたらいいのだと。そのために、どういう原理と仕組みがいるんだという、ここが不明確だったら、何をしても意味がないですよ、そんなもの。一番大事な原点が見えないような仕組みをつくったって、意味はない。

介護保険だって、私は自分の母親が、今大阪で要介護3なんです。3です。パーキンソンで、ほぼ寝たきりです。だから、毎週大阪に帰る理由は、実は一つはそこにありまして、というのは、介護保険は一応、地域で暮らす人を支援するということになっ

ていますけれども、家族の支援がなくて介護保険は成立しないんです。家族が見ているということが前提の地域支援なんです。だから、要介護3でも、母親はほぼ寝たきり状態です。そうすると、使えるサービスは、ばらばらです。あとは全部家族が、朝から晩まで支援しなければ、地域で暮らすことなんていうのは、あの介護保険のあのサービスでは不可能なんです。だから、結局、私の妻も私も、みんな総動員されて、母親が施設に行くのが嫌だと、家で暮らしたいと言っているわけだから、その母親が暮らすためには、もう家族総出で動かなければ仕方がない。これを地域支援と言われてしまうと、ちょっと苦しいなど。もう少し、やはり本当に地域で暮らすということを支援するためには、この国はもう少し真剣に地域で暮らすための仕組みをつくっていかないと、これ、なかなか苦しい。介護保険でその状態だから、まして介護保険よりもサービスメニューも支援のほころびも出てきている障害者自立支援法においてをやです。これはもう、大変な状況です。東京都は、23区あるいはそれ以外のところでも格差は大きいですし、さまざまですから一概に言えません。かなり高いシステムをつくっている23区以外のところは23区でも、かなり高いサービスを、レベルを誇っているところもあります。しかし一方で、やはり格差は大きくて、本当に、区によってはサービスの少ない、障害者の自立支援法の中でも、例えば重度訪問介護なんかでも、かなり大きな格差が出てきています。その辺を、少しこの図で説明をさせていただきますけれども。

その話をしたら、障害者自立支援法の問題点を言っていると、これまた二、三時間、あっという間に終わってしまうんです。ちょっときょうは、この話だけをするのではなくて、きょうは地域で暮らすための原理的な話をとおっしゃってもらっていますので、最初に、自立生活支援ということを少し話をしますけれども、私は、この自立生活支援というのは、初めよくわからなくて、本当に身体障害の重い障害者の方とつき合って、彼らとの関係の中で、やっとわかってきました。それは、要するに、重症心身障害の方もそうなんですけれども、要するに、本人が主人公だということです。本人が、本人の人生の主人公だと、当たり前だけれど。障害者一人一人のご本人が、ご本人の人生のドラマの主人公なんです。このことが本当にちゃんとわかっているかどうかです。ですから、支援する人間というのは、基本的に黒子なんです。つまり、障害者一人一人が主体的に生きていかれる、自立生活というのは主体的に

生きていかれるということの支援なんです。本人が人生の主人公、ドラマの主人公ですから、私たちは、それを黒子として支援者は支援する。でも、おもしろいことがあって、障害者の方によっては、おまえ、ちょっと、一緒にしばらくこっちにいろよと、おれと一緒にこんなことをしようよとおっしゃられて、ドラマの助演をやったりわき役をやることはよくあるんです。私も時々、支援しているとき、わき役をさせてもらったり、ドラマの助演者とかをすることがあるわけです。でも、主演したらだめだという、ドラマの主人公は本人であると。だから、支援者は、障害者のドラマを楽しんだり、十分楽しんでいいんですけれども。

一番だめなのは、監督したがるやつなんです。監督。わかりますか。障害者のドラマのシナリオを書いてはいけないんです。それは、本人なんです。本人の人生だから、本人の人生なんだから、監督とかシナリオを書くのは絶対だめなんです。なぜかという、皆さんも人生やってわかりますよね。私たちの人生って、みんな一人一人ドラマ、筋書きはないんです。私なんかも、東京に来て、こんな講演をするなんて、夢にも思わなかった。まさに人生は筋書きのないドラマでありまして、筋書きが存在しているときは、必ずそれは自立生活ではないんです。筋書きがあるということは、だれか仕切っているやつがいるということなんです。だれか仕切っているやつがいるということは、その人は自立生活をしていないということなんです。だから、大事なことは、どんな障害を持っている方も、どんな人も、人生は筋書きがないんです。ドラマなんです。だから、筋書きをだれかが監督したり、シナリオを書いたりしたらだめという、ご本人の生きざま、生き方を、私たちは支援すること。つまり黒子になったり、あるいは助演したりすることはあっても、監督はだめだよと、それからシナリオを書いたらだめだよということです。

これは当たり前のことみたいだけれど、結構そうではないんです。それは、胸に手を当てたらわかるよね。私は統合失調症という精神分裂病を持っている弟がいるんです。弟の人生のことを考えたりすると、やはり胸が痛いときがあります。それは自分たちの人生の都合で、いろいろなことがありました。大変な状況のときに、入院してもらったこともあります。やはり、それは、いろいろ胸に手を当てると、本人のことを考えてきたけれども、やはり、いろいろ、本当に難しい。だから、ここはもちろん、家族というのは、お互い助け合い、助け合ってだから、

すべてがご本人の思いどおりにいくわけではない。しかし、それでも、やはりドラマの本人の人生の主人公として本人が生きていかれるように、できるだけ支援していきたいと思うんです。これは、支援する側は、特にそうです。

私、障害者の支援をしていてよくわかったことがあります。それは、知的障害とか重身とか、それからいろいろな身体障害とか、いろいろな方の支援をしているときに、支援する側にもある種の個性とか特色とか、雰囲気とか出てくるんです。初め、私は一番嫌だと思ったのは、知的障害の支援をするときなんです。知的障害の支援をするときに、支援する側にもものすごく個性が強いんです。支援する側には、おもしろい人がいっぱいいるんです。初めおもしろかったんです、私。知的障害の支援する人は、個性的で魅力的でおもしろいと思ったんだけど、やはり、彼らが最終的に物を決めているんです。知的障害者が決めているのではないんです。私、頭にかちんと来て、おかしいのではないかと。どんなに魅力的で個性的であっても、あなたたちが決めるのではないのではないんじゃないかと。この知的障害、一人一人の方の生き方というのは、それぞれ個性もあり、違っているのであって、あなたたちが余りにすごい迫力でのさばってくるのは、ちょっと違うのではないかと。それは、知的障害の支援で、一番典型的でした。重身の支援なんかになったら、もっと典型的なんです。彼らはおっしゃらないと思っているから、支援する側が何でも好き放題できるんです。これは、とても恐ろしいことで、そうではないと、知的障害の支援でも、重身の支援でも、ずっとやっているとわかります。

例えば、彼らのイエス・ノーなんていうのは、明確なんです。選択肢さえ提供すれば、つまり、支援する人を5人かえたら、必ず本人は来てほしい人にはこうするけれど、来てほしくない人間は、こうしますよ。私なんか、何度、これをされたか。私は、実は、大学院に、表向きは大学院に行っていたんですけど、23歳から35歳まで13年間、心身障害児通園事業というところで、週3日間職員をやっていたまして、お母さんの支援と子どもさんの、つまり学校に行くまでの重い障害を持っている方々の支援を13年間現場でやっていたものですから、特に私は、自閉の人たちに好かれるタイプでして、自閉の子たちといろいろなことをするというのは。ところが、重身の人は苦手なんです。やることが荒っぽいというのか、抜けているというのか、不器用なんです。だから食事の場面が一番下手で、彼らは、タ

イメージを間違うとむせてしまって、嚙下をする力がないですから、間違うと詰まってしまうんです。詰まっても、うっと吐き出す力がないものですから、見る間にチアノーゼになって、真っ青になるわけです。もう大変。そうしたら、彼や彼女の担当している職員が飛んできて、「先生、何するの」と言って、ぱっと押されて、ぱっぱっとたたいて、もとに戻ります。そういうことを一遍か二遍やったら、もう確実ですよ。その本人は、私が近づくだけで、もうこうです。おまえ、どこかに行けと、おまえなんか絶対支援してほしくない、もう明確な意思表示が出ます。

だから、結局、青葉園なんかでもやっていますけれども、着ている服なんかでも、お母さんの好みの服を着るよね、どうしても、本人は。お母さんは、この子はこの服が好きだと言うわけです。お母さんの好みだから、お母さんはそれしか着せてないから、母親はそう思い込んでいるんです。これは本当におもしろいです、支援していると。例えば、ものすごく本人が気に入るボランティアとか職員が出てきて、その人が着ている服が違う色だとすると、今度、服、きょう何を着ようかといって色の違う服を二つとか三つ見せるでしょう。そうしたら、やはり、その職員さんの方の服を見るんです。絶対そうなんです。その職員さんの服の色に、つまり選択肢が広がる。お母さんの好みと違う色を、本人はちゃんと。だから、やはり、選択というのは、どんな重い重身の方でも、選択というのは経験なんです。経験を、いろいろな経験する幅を彼らに、彼女らに提供せずに、彼らは何もできないとか、何も決められないとか、好みも何もないと、そんなうそを言うなよと。あなたたちが経験させてないだけじゃないかと。これ、本当にそうなんです。だから、やはり経験する幅とか人生の幅を彼らに提供することが、私たちの支援の一番大事な本質なんです。だって、自己決定とか自己選択なんて美しい言葉言うけれども、自己決定、自己選択なんていうのは、本人に選択する幅がなくて成り立つなんていうことはあり得ないんです。

例えば、今、障害者の施設で、地域移行なんかやるときに、精神科の病院でも、それから施設でも、言うわけです。本人の、要するに契約するときには本人に必ず、この施設にずっといたいのか、違うサービスが欲しいのか、地域で暮らしたいのかをちゃんと聞きなさいというふうにマニュアルには書いてあるじゃないですか。マニュアルで。書いてある。それ、本人に、重い知的障害の方が施設に20年暮らしておられた。そろそろ家族のことも忘れつつある。

その本人に、1回も友達のグループホームに行ったこともない、グループホームのことも知らない、施設の生活しか知らない人に、この施設にいたいのか、それともどこかに行きたいかと聞いて、何の意味があるのか。意味なんて、あるわけない。だって、本人は、ここを追い出されたら行くところがないもんね。もう本人は、いたい、いると言うのに決まっている。いたいんだな、はいマルと。そんなうそはするなよと。なんの選択肢の経験も、ほかに違うところの経験もささないで、本人、ここにおりたかったと言っていますと。それはうそです、うそ。全くの虚偽です、そんなものは。

ただ、では選択肢があったらうまくいくのかというの、これまた別なんです。というのは、選択をするという経験を、彼らがそもそも奪われているということをわかってほしいんです。これは、やはり、こっちが胸に手を当てて考えなければいけないことです。今、もし、こうやって重い障害を持っている方のお父さん、お母さんがいらっしゃったり、学校の先生がいらっしゃったり、施設の職員さんがいらっしゃったらわかりますよね。どこまで本人に、必ず本人に聞いて物事を進めているか。本人に、例えば、きょう行くときに、これとこれ、どっち着るか、あるいはきょう土曜日何をするか、何かしたいこと、こんなこととこんなことを前にしたけれども、きょう、どんなことをするか。あるいは、学校の中でも、授業の中で選択肢を設けて、何か本人に選ぶ体験とか経験をちゃんとしてもらっているかといったら、やはり支援している側は胸が痛むと思います。していない、ほとんど、実態は。その選択肢がないし、職員もいないし、そういう状況がないのはわかる。でも、それだったら、本人も、選択するということがわからない。選ぶということの意味すらも、つまり決めてもらえるものとか、決まっているものだと思って生きているわけだ。選ぶという、物事を自分が人生の主人公で、自分は選ぶ人間なんだ、選べるんだということ、そのものが、そもそもわからない。それで本人が人生の主人公と言えるのかといったら、それはうそですよ。主人公でない人間にしまっているんです、もう。決めているということとは。

だから、常にやはり、支援する側は、いつも考えなければいけないのは、とにかく選択するということをも本人に少しでも、そういう当たり前になじむ、当たり前であると、僕は人生の主人公で、僕が選んだと。だから、せめて幾つかの選択肢がどんなものにもあっても、やはり選んでいける。だって。幅

広い選択肢を提供できるだけの余裕も、職員の配置も、日本のサービスの仕組みもないんですよ、これは。正直言ったら。ない。でも、やはり選択肢を設けていくということは、彼らが人生の主人公になるための第一歩なんです。最初の第一歩は、選んでいくという、自分らしいものを自分で見つけて決めていくということを、そういうものを提供しなければ、生まれてこないんだということ。これは特に知的障害の方もそうだけれども、やはり、重い身体障害の方も、なかなかこの国は、重い身体障害の方に、養護学校なんていうものを用意しているんです。重い身体障害者の方の養護学校なんていうのは、もうこれは先進国としては考えられない状態です。つまり、基本的に、身体障害の方は、どんな重くても、インテグレートされたりメインストリーミングされている、普通学校で一緒にやっているというのが、基本的な姿です。だから、重い身体障害を持っている方が、養護学校でスクールバスに乗って、家・スクールバス・学校、学校・スクールバス・家なんて、それはもう本当に、これははっきり言ったら、これは人権侵害、差別と言ってもいいぐらいです。こういう生活をしたら、当然普通の子どもが普通に経験できる、つまり帰りに友達の家へ寄ったりという道草をしたり、何か物を買ったりとか、いろいろなことが起こるということがないわけだからね、バスに乗せられてしまうと。家・バス・養護学校、養護学校・バス・家というのは、つまり普通の子どもとして、いろいろな社会的に生きていくということのノウハウを一切彼らに選択肢も経験も与えないということと同じなんです。他の国でも、これはすごく努力している。イギリスなんかで、私が、これは1990年ですからね、もう20年前に行ったときに、イギリスも、知的障害の方も含めて、スペシャルエデュケーションをやるときには、必ず月に1回、土日は宿泊の、泊まりのところがあって、できるだけ普通の障害を持っていない方と障害を持っている方が一緒に土日はそこでキャンプ活動をしたりして、いろいろな経験を、普通の子どもがやる経験を普通にやっていて、少しでも人生のドラマの主人公になるための経験をつくっていくということをやっている、これをしなかったら、彼らはちょっと普通の人と違う人生を歩まされてしまうんですよとおっしゃるんです。こういうことが、やはり一個一個ちゃんとない、主人公になれないから。普通のドラマの主人公になれないから。ここのところがすごく大事です。

二つ目は、地域生活支援ですね。地域で生きるこ

とができるためには、いろいろな支援が要るのはわかります。つまり、本人中心の計画というものを、いわゆるケアプランです。本人中心のケアプランを立てて、一人一人が地域で暮らす仕組みをつくりまします。例えば、日中の活動、それから夜間の、いわゆるグループホームなりアパートなり、あるいはそのために必要な介助の仕組み、あるいはグループホームから自分の働いている場所までの移動交通のための支援の仕組みであるとか、そのサービスはどんなのがあるかというのは、後で表が出ますけれども、そういう地域で当たり前に暮らすための仕組み。あるいは土曜日・日曜日、土日どんなふうなことをして人生を楽しむかという、そういうことの仕組みの全体の支援ですけれども、これは、フォーマルな仕組みと、つまりサービスの仕組みと、あと本人が何をするか、地域の住民とか家族が何をするのか。仲間による支援の和という、向こうはサークル・オブ・サポートと言いますけれどもね、サークル・オブ・サポート。つまり、インフォーマルといいますか、普通の、つまり地域の住民とか市民とか、あるいはスーパーのお店の方とか、あるいは地域の商店街のいろいろな方々であるとか、喫茶店のお姉さんであるとか、いろいろな方々の、この地域のいろいろな方々におけるサークル・オブ・サポート、支援の和というものをどうつくっていくのか。この中には、自分の、本人が好きなお友達とか、あるいは同じ活動をしている障害当事者の仲間とか、いろいろな方が入ってきます。本人と地域住民が主体的に参加・参画することなくしては、地域生活支援は展開しません。

これが、今言った、こういう絵を描いてみました。私は、もうかれこれ二十数年教員をやって、13年間障害者の仲間といろいろやってきましたけれども、1970年代から、大阪のあるところで、ずっと地域生活の支援をするときに、障害を持っている子どもさんのところでしたから、子どもさんの支援をやっているときにいつも思ったのは、できるだけ、どんな重い障害を持っている方も、将来自分の支援したご本人が、施設とか病院ではなくて、地域でずっと暮らしていける仕組みをつくっていききたいなというような思いがありまして、ですから、うちの心身障害児通園事業は、基本的に1年なんです。1歳半検診で、心配なことがわかってきたら、1年間だけで、あとは全部保育所に行くんです、統合保育です。1970年代にそんなことをしたところというのは、ほとんどなかったと思います。80年のころは、もうほぼ、どの子もすべて普通の保育所で、支援者を、

介助者をつけて統合保育するということをずっとやってきて、普通の、一緒に育ちながら大きくなってきて、実際に地域に行かれて、そうしますと、地域で暮らしていられるんですけども、施設の中で暮らしている方もいらっしゃると思います。

私は、施設というところ、ずっと学生が就職したりしていますから、一緒に行ったり、施設の職員さんと研修をやったりとかしたときにわかったのは、施設というのは、サービスを4種類やっています。どんな施設も、基本的に4種類以上のサービスをしている施設は基本的にないんです。入所施設とかというのは、基本的に四つのサービスをしています。一つは、やはり一番大きいのは、バリアフリーの宿泊まりするところがあるという住宅サービス。これはやはり、施設はやはり住宅サービスとしてはレベルは高いです。これは、ただ、いつも議論しているのは、この住宅サービスのレベルの高さは、利用している利用者のために、こんなにバリアフリーになっているのか、支援する側にとってすごく都合がいいためにバリアフリーになっているのかという議論があって、いや、両方のためだという議論になるんですけども、時々、かけてあるチェーンとか鍵とかを見ていると、あれ、職員さんしか開けられないところについているなどかと思うんです。これ、職員の都合のチェーンではないのかと。本人の都合だったら、こんなところにチェーンはないぞと思います。職員さんと話をしたら、いや、先生、そんなこと言うけれども、あなたの言うことはきれいごとだと。職員体制が薄いときには、急に本人が飛び出されたりしたら、ぱっと対応ができないから、鍵がいるんだとかという話になってくるんです。議論はいつも、職員体制の薄さの問題なのか、それとも支援の仕組みの問題なのか、あるいはと、いろいろそういう議論になります。もちろん両方ともありまして、特に日本の場合は、ほかの国と違って、施設の職員さんが非常に少ない。アメリカの4分の1、アメリカを見たら4分の1ぐらいです。スウェーデン、デンマークの6分の1ぐらい。つまり、職員は、日本は圧倒的にほかの国より少ない。だから、日本の入所施設の職員さんが、本当にすごく大変な業務をされているということは、実際に我々はよく実態がわかっています。

一つ、住宅サービスがある。次、介助です。確実に介護サービスはあります、この施設も。ではあとはといったら、日中活動がありまして、当然、一定の看護をされる方がいらっしゃる人が多いですから、一部の医療と、あと職業リハビリテーションで

あるとか、職業訓練であるとか、そういうものが、一応用意されているということがありますがけれども、実は施設の一番大きなメニューはそれではないんです。施設の最大のメニューは、本人の日常生活をマネジメントしている。つまりサービスをコーディネートしているというのが、この入所施設の最大のサービスです。つまり、本人の生活を仕切っているということです。朝何時に起きて、何を食べて、歯を磨いて、昼、うんこをして、歯を磨いて、おしっこして、午後何時に風呂に入って、こんなことをして・・・と、そういう彼らの日常生活を基本的にマネジメントして、サービスを組み合わせてコーディネートしているというのが入所施設の最大の、実は特色です。ここは、やはり最も入所施設の問題そのものなんです。それは、きょう話をしました。つまり、自分で人生の主人公になるために一番大事なことは、どんなに大変でも自分で物を決めていくことなんです。決めるということをなくすと、人間というのはドラマの主人公ではなくなるんです。だから、入所施設というのは、その問題で一番、やはり大きな問題をはらんでいるんです。自分で物事を決めなくても、流れに任せてしまったら、そのまま人生は進んでいってしまうと。つまり、ドラマの主人公にならなくても生きていける。

では、ドラマの主人公になるためにどうしたらいいかといったら、これはおもしろい話があります。例えば、身体障害者療護施設、身障療護に入った人、これは本当にドラマチックな話を聞きます。入ってしばらく、例えば私たちの仲間に入った連中は、交通事故を起こして首の骨を折ったりすると、結局、入った連中は、例えば夜いつも本を読んでいて2時や3時に寝たりするわけです。朝起きる時間が、いつも昼ごろ起きてくるわけ。それが本人の、学者とか、その辺研究していったり、学生とかの大体の生活のパターンです。行って、すぐに、初めトラブるわけ。消灯時間決まっている、やめてくれと。おれは2時まで本を読んでいるんだと言うわけ。朝ご飯は要らない、おれは昼まで寝ているからと。昼ご飯と晩ご飯だけ頼むわと。そうしたら、即、ぶつかる。いや、ほかの人に迷惑がかかるから、4人部屋なんだから、あなただけのために電気つけられないから、この時間に消灯ですと。あとは基本的に我慢してくれと。朝、あなたがもしどうしても寝てたいのなら寝ていてもいいけれど、もちろん朝ご飯抜きだし、あと、あなた、起きてからおしっこ、うんことか、それからこういうことはどうするの。それはあなたたち職員がやるんだろうと。私たちはローテーショ

ンがあるから、あなたがこの時間に起きて、こうしてくれなかったら、あなたのためだけに、そんなものは組めないから、そのときはあなたは自分でやる、やるってできるのならいいけれど、できないのだったら、このローテの間に入ってね。この時間に寝てようが何しようが、やらなければ仕方ないねと。本人は、何を言っているんだと、おれの人生じゃないかとなるんですよ。初め突っ張っているけれども、結局突っ張っていたら、職員との人間関係が悪くなるし、自分の思いどおりいかないことばかり出てきて、すごく大変な状況になってくるわけ。

それで、結局、あるときにわかるんです。こんなふうにして抵抗したら、すごく施設では疲れる。つまり、相手のペースに任せて生きていたら、それなりに、少しぐらい時間は減るけれども、読みたい本も一定の時間読めるし、相手のペースに合わせていったら、それほど嫌な思い、いつも嫌な顔をして過ごすやらなくても生きていけるし、ああそうかなとなったときに、本人の、最初の人生の闘いのドラマは終わるんです。そんなものなんです。

これは、本当にシビアですけれど。最初に、これはもちろん東京の一部の施設、身障療護は、そうではないですよ。これは闘ってこられた歴史があるから、かなり当事者指導で物事は進んでいる。一部の療護は。でも、全国の身障療護は、ほとんど今言った話のとおりです。ほとんどの全国の身障療護というのは、そういうものなんです。

だから、結局、合わせて生きる、自分で物を考えなかった方が楽になるんです。だから、つまり、日常生活のマネジメントとサービスコーディネートと、つまり合わせた、施設のアイデンティティと私は言うのですが、施設のアイデンティティに合わせて生きることが生きやすい生き方なんです。合わせて生きていくと、20年もしてしまうと、今度は地域に帰ってくるのが怖くなるんです。自分で決めていないから、すべて相手任せで生きてきたから、今度は一から自分で何かもかも決めなければいけないと言われたら、そんなこと、もうこの数十年していないから、何していいかわからないから、もう少し施設にいるよ。別に、それはもういいよと、ここにいますよという、そういう状況に本人をしてしまうんです。

私は、施設の持っている一番大きな問題は、ここだと思うんです。本人の自己決定、自己選択、生きていくと、自分で生きていくというドラマの主人公であることをなくしてしまうということが最大の問題で、だから、ドラマの主人公であることを認

めている施設があるとしたり、あるいは、私、秋田県に、もう市長は変わったけれど、鷹巣ってあったよね。鷹巣に鷹巣ケアセンターというのがありまして、鷹巣の市長と仲よしだったから、彼らのところに、たしか**オカマキ**さんと**カズオ**さんがずっとかかわっておられて、私は**オカマ**さんと一緒にあそこに行つて、鷹巣のケアセンターという、その施設の特養、老人保健施設ですけども、施設に行つて、私は始め、施設だから、ここもきっと一人一人のドラマなんかなくて、仕切られていると思つて行つたわけです。そこは違つた。びっくりした。個室なんだけれども、個室があつて、一緒になりたいときは共同でやれるところがあるんだけれども、一人一人の生活は本当に本人が自由に組んでいるんです。だから、友達が来る、犬が来る、いろいろな人が出入りしている、そういう、かなり自分の人生を、そこはだから、あれは住まいと言つてもいいです。住まいにサービスが組み合わされているケアつき住宅、ケアつき住宅みたいなもので、ケアの仕組みと住宅の仕組みが別々にあつて、仕組まれているくらいまでいけば別でしょうけれど、今の日本の入所施設とか精神病院というのは、ほとんどやはり、基本的に、これは本人の人生のドラマとしては成立していないです、はっきり言うと。

そうすると、ドラマとして普通に成立しようと思つたら、大事なことは、やはり、今四つしかサービスがないと言つたよね。ものすごく簡単なことがわかつたんです。四つしかサービスがないということは、四つのサービスを地域でやったら、どんな障害者も地域で暮らせるんです。だって、あの入所施設では四つしかサービスがないんだから、4種類のサービスを地域でやれば、どんな重い障害者も地域で暮らせるはずですよ。四つのサービスを地域でやるということは、実は、こうして絵を描いたら、この点点点の外側は、地域のサービスなんです。これだけを地域でやってしまったら、どんな重い障害を持っている方も地域で暮らせる。

そのサービスの一つは、日中活動です。ただ、施設の場合は、例えば日中活動というのは、職業リハビリテーションの訓練であつたり、日中のいろいろな、いわゆる作業をされていますけれども、地域で暮らすと、結構メニューがふえてしまうんです。なぜふえるのかといたら、一つは今言ったように、この地域の医療の問題が出ます。地域医療をどうするかというのは、こっちの端っこに出ていますけれども、それ以外に、せめて三種類ぐらいサービスが出ます。一つは、やはり、施設ではなかなか言い

くいけれど、やはり働きたいという、もっと働きたいという思いが出ます。そうすると、その就労支援をどうするかという問題が出ます。ですから、この就労に向けた支援のプログラムをどうしていくのかということが、一つの大きなメニューになります。

二つ目は、社会活動。社会の中でどんな活動をするのかと。地域の中で。ここは実は、作業所運動というのをやっておられましたよね。私も無関係ではなかったんだけど、私、基本的に作業所は嫌いなんです。変わり者なんです。大体、私は、1970年代から入所施設は嫌いでした、入所施設が嫌いと言ったら、あのころは変人扱いされて、あのころはばんばん施設ができてきた時代だから、入所施設をつくっている時代に入所施設が嫌いだったものですから、ものすごく変なやつだと思われて変人扱いされましたけれども。作業所ができるころは、何か作業所というのはなじめなくて。なぜかと言ったら、作業所というのは、うまくやれなかったら、すごく難しい問題をはらんでいるんです。地域の拠点運動と言って、作業所というのは、地域で、障害を持っている地域で、家の中で行くところなく、養護学校を卒業して行き場のない方々が拠点で作業所をつくって、その作業所を拠点にして、例えばボランティアを集めたり、小学校に行って、小学校の子どもに来てもらったりとか、学校、小学校に行ったりして、地域を変えていくという活動の拠点にしようという初めの建前があったんです。そのときには、建前はいいけれども、本当にできるかなと思ったら、あっさりそれは数年で終わってしまっただけで、もう今度は、今までは家・バス・養護学校・バス・家だった、今は家・作業所、作業所・家になってしまった。本人は、やはり、普通の市民生活をしてないわけです。家と作業所を行ったり来たりしているだけという。おかしいのではないのと。これって、何のために作業所をつくって、作業所に行ったら障害者しかいない。障害者ばかり一カ所に集めて、固めて集めて、それで作業所と家を行ったり来たりしたら、地域の普通の市民の生活とは、もう全く隔絶された仕組みになってしまう。活動の拠点ではないじゃない。だから、私は、作業所というのは、基本的に、そういう意味で嫌いなんですよ。

大阪なんかでやっている連中がおもしろいのは、作業所というのは、金は作業所で取るんです。でも、全然作業所にいないんです。何をしているかと言ったら、地域の調査活動とか言って、地域で、地域のバリアフリーのマップをつくったりとか、音楽活動だとか言って音楽の練習とか言って借りて音楽をや

って演奏会に行ったりとか、とにかく工賃になるような仕事は全然してない。それで、表向き作業所なんです。私は、それ大賛成で、袋詰めで、閉じこめられて袋詰めして、今、工賃は1銭とか10銭とかです。だから、月に3,000円とか5,000円もらうために6時間も市民と無関係なところで一生懸命働いて、3,000円、5,000円もらって、何の社会的意味があるか。本人が、どんな満足感があるか。それは、周りの人間の満足感だけではないのかと。市民として、本当に成熟して生きているとは言いがたい。やめておけと。

私だったら、私、今朝霞で作業所とタイアップして、地域のクリーンキャンペーンというのをやっている。知的障害者のご本人と大学の学生と一緒にやって地域にクリーンキャンペーンに行くと、地域の、特に駅なんかを、ごみをきれいにするんです。地域の住民は、みんな、その知的障害者とか学生等と一緒にやっているのを見ながら、中には礼をしていく者もいる。だって、自分、たばこをばいとかしたら、知的障害の人が、だめだよとか言って、こうしてごみをとって、こうするわけ。そうしたら、恥ずかしいのは市民であって、知的障害の方が、ずっと市民。ごみを拾って、立派な活動をしているわけ。つまり、クリーンな活動をしているのは、知的障害者本人。ダーティーな、ばいをしているのは、市民なわけ。わかるでしょう。彼らは、すごくやはり、自分が生きているというプライドは出てくるし、地域の住民は、彼らは、やはり地域で暮らしているとわかる。こういう人がいらっしやって、いろいろなことをしているんだなという。1銭にもならないよ。でも、3,000円もらって、1日100円もらって閉じこめられて、市民と何の無関係の中でプライドも生まれてこないような仕事をしているより、やはり、社会の中で、社会的な参加の活動をしながら、地域の中でいろいろな生きざまを見せていくというのか、一緒に生きていくために何かしていくという戦略をとるべき。もちろん、一般就労したいし、一般就労できる方は就労支援してから行かれたらいいと思う。

やはり、日本の会社も、もっと変わっていかねばいけないうと思う。私、会社が変わってほしいなと思うのは、やはり、この国の職場は、ある意味で変なんです。ある意味で。ある意味で非常に職場なんです。変な言い方だけれど、カナダにいて、私、初めびっくりしました。カナダというのは、とんでもない国だと初めは思った。例えば、会社で話を聞いたら、欠勤が多い。聞いたら、きょうは娘の誕生日だとか、きょうは娘が入学式の何かがあるとかい

ったら、会社は休まれるんです。休まれる。聞いた  
ら、だって、家族の大事なときに休まないなんて、  
家族を、つまりファミリーファーストなんです。ジ  
ョブセカンドなんです。つまり、哲学ははっきりし  
ているんです。家族とともに生きるのが一番大事で  
あって、その次に家族を支えるために働くがあるとい  
う。家族のことを置いて、そこまで言われたら、  
野球の試合のとき、あったよね。どこかの大事な4  
番バッターが、うちの嫁さんがお産するからといっ  
て4番抜いて、どこかに帰って、一週間帰ってこな  
い。応援しているチームのファンにしてみたら、あ  
のやろう、大事なところの試合のときにアメリカに  
帰ってしまいやがって、何というやつだと思うよね。  
でも、向こうは当たり前なんです。嫁さんがお産の  
ときに野球をしている場合ではないと。奥さんのそば  
にいて、奥さんを見守って、赤ちゃんを見守って、  
終わってから帰ってくるというのは。そういうこと  
を、いろいろなことを経験しているうちに、何が  
大事かとか、どんなふうに生きていくべきだとか、仕  
事と家庭と社会との両立とか、地域活動との全体を  
どうバランスをとっていくかとかいうことについて、  
やはり、私たちは、これからいろいろなものを学び  
ながら、それなりに私たちらしいものをつくってい  
くということが必要です。

確かに、カナダは極端過ぎると思う。だって、テ  
レビ、私、実は、半年間住んだけれども、テレビは  
貸してくれるんです、そこのマンションに住んだら。  
貸テレビなんです。よく壊れるんです、また。ソニ  
ーさんか何かしてくれたいのに、向こうのゼニス  
か何か、アメリカのメーカーがすぐ壊れる。そう  
したら、修理屋が来るんです。これがもう、大変で  
す。昼ごろ来て、ちんたらちんたら仕事をするんだ  
けれど、全然終わらない。直らない。5時になっ  
たらどうなると思う。直ってなくても、さよならで、  
はいさよなら、また明日って行ってしまう。直つ  
てないのに、帰ってしまう。おれ、テレビが見れな  
いから困るだろうと思うけれど、5時で終わりです  
よ、向こうは。直ってなくても直ろうが、勤務時間  
は終わったわけ。さよならって帰ってしまう。あの  
ときは、さすがに私、思わず、もうちょっとちゃん  
としろよと、それは余りにいいかげんじゃないか  
と思ったけれど、それが働く文化です。文化とい  
うのは、そんなもんなんです。

ですから、私たちは、働く、地域で活動する、い  
ろいろなものを私たちの日本の文化は当たり前だ  
と思っているけれども、どういう仕組みをつくって  
いくのかというのを、これは、これからやはり、若い

人たちも含めて、本当に、この国、つまりエコの  
問題も考えたり、社会活動、社会参加、社会貢献  
する会社の問題とか、あるいは障害を持っている  
方が就労しやすい仕組みをつくっていったら、も  
う少し、奥さんだけではなくて、だんなも子  
どもの育児休業とかとりやすくなる。育児休  
暇をとりやすいとかいうの、思うよね。

こんな話をしているかわからないけれど、育  
児休暇をとるのは、私は、はっきり言うけれど、  
私はずっと、お母さんの10年間、大阪で勤  
労婦人ホームというところで電話相談とか面  
接してきましたから、ずっと、いろいろな子  
育て支援のプログラムってやっていたんです。  
そうすると、大体、男と女のカップルでい  
うと、8対2で、お母さんの方が会社を休  
んで子育てした方がいいのが8、でも2は、  
お父さんの方が休んで子育てする方がい  
いタイプのカップルがあるのよ。お母さん  
の方がキャリアウーマンで、仕事ばりばり  
で、仕事の方が向いているという、ど  
ちらかというと子育ての方はパパの方が  
向いているというタイプは絶対出てくるん  
です。当然なんですよ。人間というのは、  
いろいろなタイプがいて人生だから。二  
組ぐらいは、お父さん、あなた休んで子  
ども見た方が、ずっとこの家族はうま  
くいくよというのがあるわけ。でも、世  
間体とか何だかんだ言っても、結局お  
母さんは、本当は働いてばりばり、す  
ごくいい能力、高い能力で仕事をする  
力があるんだけど、お母さんが休んで、  
それでお父さんが仕事に行くんだけど  
も、お父さんは子どものことが気にな  
っているし、お母さんは仕事のことが  
気になっているから、結局、子育てが  
うまいかないわけ。それで、相談で、こ  
っちに来られるわけ。いつも思うよ  
ね。あなたたち、かわって、お父さん  
子育てして、お母さん仕事に行ったら、  
よほどここは子育てうまいくよとい  
うのがあるんです。そんなことが、ま  
だまだこの国は柔軟にできない。世  
間体、表向き、男が長時間休んで子  
育てしたら、後で何を言われるか  
わからない。そんなことばかり言  
って、でも、子どものためにもなら  
ないし、本人のためにもならない。  
もっと、やはり適材適所、適正に合  
った生き方というのを、本人の自己  
実現とか、本人の子ども的人生の  
自己実現とか、自己決定、自己選  
択を、もっと自由にやれる社会に  
していけないといけないよ。でな  
かったら、もう、どんどんこの社会  
は腐っていく。うまくいろいろな  
ものが回らない。

かつては、うまくいった理由は、お母  
さんが子育てよりも働くのが得意な  
お母さんの場合、結婚していない  
お婆さんとか、年の上のお姉さん  
とか、いろい

ろいたのよ、地域に。その人たちがサポートしたんですよ。だから、決してお母さん一人で子育てしたんじゃないんです、昔は。いろいろな周りの人間が、わいわい言いながら子育てしているから、子どもが何とか育った。今は、でも、核家族でお母さんとお父さんだけに任されてしまっているから、本当に今の子育ての仕組みは大変です。

実際に私が相談を受けても、もう、本当に難しい。虐待すれすれ、虐待、いろいろな問題、ネグレクト、いろいろな問題が出てきています。でも、それは、決めつけているからですよ、社会が。もっと、いろいろな人間が、いろいろな人間関係の中ではぐくまれてきた、ああいうものをなくしてしまって、本当にかた苦しい、全部お母さんに責任を押しつけるなんてばかげたことをしているから、この国は本当に難しい状況に、若いお母さん、女の人を追いつめています。本当に若いお母さん、女の方は、本当に気の毒としか言いようのない。これで、子育て、もっとたくさん子どもを産んでほしいとか、少子高齢化だからと、そんなことを言ってもうそだと、女の方はわかっている。こんな国で子どもを産んだら、自分だけに責任を押しつけられて、しかも社会は仕事もしろと言うし、これしろ、あれしろと、それは間違っています。もっと、やはり、本当にまともに考えなかったら、この国はもう、ある意味でぐちゃぐちゃ。だから、大事なものを、本当に何が大事かということを考える、そういう意味で障害者問題も含めて大事だと思う。

障害者問題なんか、その一つの大きなかぎを、ヒントを与えてくれる仕組みです。あと、認知症のおじいちゃん、おばあちゃんの問題なんていうのは、本当にこの社会をどう変えていくかという大きなヒントを与えてくれそうな気がします。あと、子どもの問題と。

土曜日、日曜日は、施設にいたら、土日という概念がなかなか出てこない。月火水木金金になりやすいんですけれども、入所施設の場合は。地域で暮らすと、当然、作業所とか通所授産とかいうのは、月から金までだから、土日が生まれてきます。ですから、地域で暮らすということは、結局は土曜日・日曜日ということがすごく大事になってくるんです。そうすると、土曜日・日曜日に、どれぐらい充実した経験ができるかが、これ月から金までどうして頑張れるかの大きな大事なことになるんです。ですから、ウィークエンドとかアフターファイブの活動支援というものは、実はとても大事なことになります。わかりますよね。つまり、特に就労とか、我々だっ

て、何のために働いているのかと言われたら、余り大きなことを言えないけれども、実際には、時々ウィークエンド、アフターファイブの方が楽しいときもある。職場の方が楽しいかと言われたら、楽しいときもあるけれども、ないときもある。ですから、やはりウィークエンド、アフターファイブが余りつまらないと、月曜日から腐って職場に行ったりすると大変です。その一週間がもたないから。土日楽しいとか、エンジョイできるということは、とても大事です。その支援をどうするかと。

あと、施設というものが持っている一番難しい問題は、4階で寝て、3階で風呂に入って、1階で活動して、2階でごはんを食べて、3階で風呂に入ってから4階で寝ると。こうなると、移動支援というのは基本的に要らなくなるんです。エレベーターがあるから。ところが、地域で暮らしますと、重い障害を持っている方、身体障害の方はもちろん、知的の方も含めて、ガイドヘルパーとか必要な方の場合は、基本的に移動交通のサービスが要ります。だから、移動交通のサービスというのは、ほかの国と、カナダとかアメリカなんかに行ったら、公共交通機関がほとんどないですから、これに予算は2割から3割かかります。つまり、とても大事なものは、家にいたら家にいっ放しで、どこかに行きたくても何かしたくても、そこまで行き着かないという問題が出ます。ここを超えていかないと。だから、アメリカが、ずっとバリアフリーの問題で闘ったり、ADA法で、つまり駅の問題とか、あるいは移動交通で、ドア・ツー・ドアの仕組みを確立していったのは、基本的に移動の仕組みが公共交通機関は特にない国は、地域は、どんなふうにすれば地域で当たり前暮らせる、移動できるかということが、ものすごく大きな大事なテーマなんです。だから、東京は、地下鉄も発達してきた、かなりいろいろ行ける。あとは地下鉄を全部に、どんなふうにエレベーターをつけるかという問題と、あと乗り込むときに段差があるという、あの段差を。あれは、アメリカの幾つかの、カナダもそうですけれども、地下鉄は全くフラットで段差がなくて、そのままばんと車いすで乗り込めますけれども、設計図的には日本の技術を持っていたら、すべてそれは可能だそうです。日本の技術はレベルが一番高いから、世界で。でも、今のところ、あの間にあっている段差はキャスターがはまってしまうから、間に物を置いてもらわなかったらプラットホームから電車に乗れません。でも、あれは、恐らく日本の技術とすれば、数十年間仕組みを変えれば、もう完全に、そんなことをしなくても、そのまま乗

り込める仕組みにすることは、いとも簡単にできるはずです。ただ、それには莫大な金がかかる。仕組み全体を変えなければいけないから、どうするかという問題があります。

でも、移動交通の問題、それからあと住宅です。住宅問題は大きいです。バリアフリーの住宅をどうするか。

最後に、この地域の共感力支援というのを、これをあと5分だけ。

私、地域の支援の一番大事なところは、きょうもお話ししましたが、同情するということと、共感するということが違うということ、ここが、やはり私がずっと今まで、いろいろなことをやってきて一番感じるのは、ここなんです。同情と共感の違いなんです。やはり、私は、統合失調症の弟がいたから、よくわかるんだけど、家族に障害を持っている人がいらっしゃる家族は、この同情と共感の違いに、ものすごくやはり心を悩まされることが多いんです。それは、自分の家族が、何か支援してもらったりボランティアしてもらったりするときに、相手の人の立ち位置が、ものすごく気になるんです。つまり、ぱっとわかってしまうんです。つまり、うちの弟のことを、かわいそうに、この人に何とかしてあげなければいけないというだけではなくて、その中に、うちの家族はこうでなくてよかった、私はこうでなくてよかったというのが、どこかで見えてしまうと、たまらなくなるんです。やめて、あなた、どうか来ないでとなるわけ。私はそうでなくてよかった、うちの家族がこんな重い障害者でなくてよかった。かわいそうに、気の毒な人だな、何とかしてあげたい、でも私の息子はそうでなくてよかった、うちの家族はそうでなくてよかったというのが見えてしまうと、もうすごく気分悪い。とても気分悪い。それはわかるでしょう。それは、家族でなくても、恐らく、皆さん言っていることわかると思うんです。

それは勉強なんかでもそうです。友達が、勉強できないときに見てくれるときに、こいつできない、おれはできて、できないで見てくれるのと、一緒になって一緒に勉強するのと違う。何かすごく気分悪いやつ、いるよね。あれですよ。あの気分の悪さというのは、もう、あれは同情と共感の違いというのは、もう本当に人間にとってすごく大きな、特に障害を持っている本人とかご家族にとっては、このことはとても大きいです。同情というのは、おのれが弱いとは思っていない。自分というのは、私も、実は支援が要るんです。助けてほしい、助けてもらって

生きているわけ。でも、わかってない、思っていない。おれは、自分は助けなんか要らない、おれは何でもできる人間だと、自分の弱さなんか全然目に見えてない。僕、ボランティアしてあげる、この人、本当に気の毒な人だね、かわいそうな人がいるねと、何とかしてあげるよ。どこかで、うちの家族は、僕はこうでなくてよかった。こうなっているわけ。してあげよう。それは、相手に自分の弱さとか、自分の問題とかいうのを、相手に投げているわけ。自分はきれいになっている。このかわいそうな人って、このかわいそうな人に何かしてあげたいというのは、おのれが弱かったり助けてほしいというのはあるわけ、本当は。それを全部相手に投げてしまって、それでやっている。おのれはきれい、おのれは、すごくびかびかしてしまっているわけ。間違っている人、いるよね、こういうのは。お医者さんとか学校の先生とか、精神科医とか、いるわけ、こういうタイプ。こんなタイプというのは、本当に支援も治療もできないタイプ。一番精神科医でもレベルが低いし、お医者さんでも一番嫌なやつ。もう、びかびか。もちろん。

白い服を着るのは、逆なんです。あれ、びかびかみたいに見えるけれども、あれは自分も本当は、支援も要るし弱い人間であるということなんだけれども、それをそのまま出してしまうと、支援を受ける側は、すごく頼りにくい。だから、白いのを着て、わざわざそれを隠して、一見、私は皆さんの治療をできる人間でございますという形をとっているんです。それは、職業柄、着る衣なんです。でも、中には、人間というのは、普通の人間だから、いろいろ、苦しいものも悲しいものも持っているわけ。でも、一応、やるときには白い衣を着られて、そしてプロとして対応されているという、そういう意味での、あれは白い衣なんです。だから、それは、とても大事な意味があるんです。初めからとって、やってくださって、初めから、僕も弱い人間ですと、それはわかりませんしと言ってくださったら、今度は逆に支援してもらおう方が、すごく苦しい状況になる。そこはすごく、一応プロフェッショナルとしての形をとるけれども、でも、本当のところは、本人も弱いところがあって、相手を共感できる、つまり相手に絶対自分の弱さとか支援を相手に押しつけないと。自分も弱いし、自分も支援が要る。それは自分も認める。ほかの人に、では、おれはびかびかで、あなただけは弱い人というふうにくれてやらずに、相手の生き方も、あなたの弱いところとか支援が必要であるということも尊重しますよ。でも、僕の弱さも

尊重してねと、僕は僕で助けて、今、助けますよ、助けてくれるときは助けてくださいね、お互いに、お互いにそうして助け合ったり助けられたりしながら、お互いに生きていきましょねという。

ですから、今、たまたま私は助ける、支援する人間ですよ。でも、私も弱くて苦しくて、助けてほしいときは……。そういう、つまり相手の苦しみとか弱さというものを自分の持っているところでちゃんと受けとめて、それを共感できると。自分の、相手の弱いところを自分の弱いところと合わせて、苦しいよね、僕も苦しいと。僕の弱さと相手の弱さがちゃんと響き合って、ちゃんと共感できるということであれば、実はすごくしんどいんです。相手がびかびかして、みんな押しつけてくださると、もういいから、しんどいとなります。そのしんどさではなくて、お互いに分かち合いながら生きていく、ここをやっていたきたいし。

それは、言葉は、今きれいなことを言いましたね。これは、実際大変です。本当に大変です。人間というのは、自分は弱いから、自分が貧しいですから、ほかの人が充実して、例えば障害者の方が、ものすごく充実して生きておられるなんていうのは、共感できる人間もいれば、できない人もいる。障害者の人は、おれよりも、自分よりもできなかったり、障害者の人は気の毒な人だから、おれは、自分は惨めな人生だけれども、障害者の人が、よりそれよりも大変な人生を送っておられるから、何とかおれを慰めていたけれど、障害者の方がびかびか、いろいろなことをしてしまうと、おれの立つ瀬がないという、おれは惨めだという人が出てくるんです。だから、自分の不満を逆支えしている人もいるわけです、障害を持っている人とか。こうなってくると、悲しい人間のバランスになってくるから、やはり、大事なことは、自分の弱さとかを認められるだけではなくて、やはり人間というのは、みんな、それぞれ自分らしく生きていけるかが一番大事です。自分たちが自分らしく生きていくから、ほかの人も認められる。自分が自分らしく生きていけなかったら、ほかの人を認めることは、なかなか難しいです、人間というのは。どうしても、より弱い人とか、より辛い人間を見つけて、その人をいじめたり、その人を、何かそうして自分を保とうとするから、そうならないように、自分も自分の、そんな完璧な人間ではなくて、こういう生き方でもいいじゃないという、こういう生き方で私を認めてねというところのラインを下げたら、人間というのは、みんなそれなりに幸せになれるし、ほかの人間との共感する力も高めて、

ともに生きていくことが少しやりやすくなるのではないかというふうに私は考えていまして、それで、そういういろいろな実践を今やっていて、西宮なんかでも、重身の方の支援をしているときに、やはり、思い重身の方なんかを支援していると、だんだん、人間素直になる。だって、重身の人なんていうのは、もう助けてもらわないと生きていけないわけだから、さらけ出している。自分の弱さを全部出して、さあ私を応援してください、私は応援してもらわなかったら、プライバシーも何もなく、さらけ出して生きているけれど、さあいらっしゃいと言っているわけ。言っているうちに、すごく素直になれる。私も、実はやっているけれども、いろいろあるんですけど、支援している側が、だんだん話をしているうちに、私も実は、うちの息子にこんなのがありましてねと、こうなってきた、余り無理しなくても、突っ張らなくても生きていけて。そうすると、本当に持っているものが全部、いろいろなものを出し合いながら地域で生きていく、そういう仕組みがつくれるきっかけは、重いプライバシーをさらけ出しながら、それでも支援が必要で、そして地域で当たり前にいる重度の障害者の方というのは、本当にそういう意味で大事な存在で、彼らがいるということが、やはり、地域を変革する大きなものだというふうに、私たちは大阪の中でやっているときに思ったりしているということでありまして、すみません、ちょっと時間を超えましたけれども、きょうはどうもありがとうございました。

(拍手)

(司会) 先生、本当にありがとうございました。

自治体や地域で、本当に実体験や実践を踏まえた北野先生のお話でありました。また、失礼な言い方ですけれども、大阪弁北野節が、時間がたつにつれて絶好調になってきたと思いますけれども、本当はもう少し長い時間、先生のお話、皆さんお聞きしたかったかなと私自身も感じておるところです。

多くのキーワードがあり、インクルージョン社会、包み込む社会というような表現を使っている、最近、先生も最近使われる言葉だと言われていましたけれども、これは、長期の失業問題やニートの問題など、社会的な孤立問題の解決のキーワードにもなっているかなと思います。

それと、自己選択、自己決定というのは、今年度からの福祉交流セミナー、冒頭のあいさつで所長が申し上げたとおり、新たな三カ年のテーマとしております。それを再確認する大切な言葉であり、先生の信念であるというところが出ていたのかなと思います。

ます。

いずれにしても、今後に向けた希望のある、彩りあるお話ではなかったのかなと考えております。

それでは、時間は押しておりますけれども、ホールの方から、お一人方だけで申しわけないんですけれども、ご質問やご意見が先生にある方、お願いしたいと思います。マイクが行きますので、手を挙げていただけますでしょうか。

(田中) 私は、田中と申します。

北野先生に聞きたいんですが、さっきのお話の中で、いわゆる地域で生きるとか、いろいろなことをおっしゃったんですけれど、集団心理とか、集団でみんなで生きるんだというようなことを、今のお話から、やり方というのをやっていますよね、先生のお話の中で。施設というところは。あのやり方というのは、僕もあれを見ていて、やはり、古い話なんですけれども、昔のナチスのやり方ですか、いわゆる収容所みたいなようなことを、僕も話を聞いていて思い出します。ガス室にみんな、何万という人たちを、障害のある人たちが連れられた話はご存じだと思うんですけれど。古い話なんですけれど。日本は、そういうことはなかったんですか。それとも、ドイツではそういうことを、異民族の浄化というのを、下品な言葉で、こんなところで言うてはおかしいんですけれど、そういうことを向こうはやったんですけれども、ドイツではやったんですけれども、日本では、そういうことはなかったのかなと。

僕たちも、今の話の中で、戦前、戦中、それから今戦後のことでも、そういうふうに1970年代、随分そういうふうに騒がれたけれど、そういうふうになって、その前のこと、僕なんか、そういうことはよくわからないんです。そういうことが余り歴史の中でも出てこないし、そういうことは余り講演でも出ないので。もしあったら、そういうことがわかっていたら教えてもらいたいと思ったんですけれど。

(北野) 今、とても難しいといえますか、大事な質問をされましたので、私の知っている範囲で申し上げますと、まず、精神障害の方に対して、ある種の安楽死を求めるお薬を回されたとかいうのが記録に載っている文献がございます。精神障害の方に対しては、あるいは身体障害の方に対しては、何かそういうことが行われたというのを、これは歴史研究の中で、やはり施設といえますか、中で、そういうものを準備されたというふうには聞いていますけれども、実際に実行されたかどうかについては、実際には何もありませんので、されなかったかもしれませんし、

せんし、恐らくそれは、良心的にとれば、何か、例えば本土決戦とか、いろいろなことがあるときに、そういう大きな状況の中で、何か苦しい目に遭わないように何か対応を、医者が対応を求められたというふうに、よくとればそうですし、逆に言えば、やはりお荷物になるというか、大変だから、そういう人たちのことを早く、何か、命を早めようというふうにされたということがあったのかもしれませんが。その辺のところは、今おっしゃったように、歴史研究の中でも非常に闇の世界で、余り細かいデータは出ませんけれども、精神科の病院の中で、そういうお薬の問題が出たということは、一つ出てきております。

それと、それと近い問題で、いわゆる断種です。子どもさんを産めなくなる手術です。障害を持っている方が、次の障害を持っている方を産まない。これは、実はかなり長期間、戦後も日本で行われていたということが、施設の側で歴史的には残っています。

そういう負の歴史というのは、実は日本だけではなくて、スウェーデンでも1975年まで、多く施設の中で、障害を持っている方が子どもを産まないような断種をするなんていうことが行われてきたということが、今、過去の証明、だんだん歴史的なことが明らかになってきている状況です。

以上です。

(司会) よろしいでしょうか。

それでは、もう一度先生に、きょうの講演の、皆様から盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

これから休憩に入りますけれども、今、32分ぐらいですけれども、会場の時計、45分まで、15分弱ですけれども、休憩に入りたいと思います。

その前にちょっと、先生の方から、きょう、「全国権利擁護支援ネットワーク会議 イン 東京」年明けた2月の開催の会議のリーフレットをいただいておりますので、受付の机のところに置いてありますので、まだとってらっしゃらないかた、お持ちいただければと思います。

オトイレは、このホールの裏側と、あとエレベーターホールの手前のところにもありますので、よろしくをお願いいたします。

それでは、45分になりましたらご着席お願いしたいと思います。

(午後3時33分 休憩)

(午後3時45分 再開)

(司会) よろしいでしょうか。

それでは、ただいまから、「働く喜びを！世田谷区のとりくみ」と題しまして、世田谷区保健福祉部障害者地域生活課長の金澤弘道課長から、行政報告のご講演をいただきます。

金澤弘道課長は、80万都市である世田谷区で障害者の就労の支援の仕組みづくりや環境づくりに、持ち前のバイタリティーとリーダーシップを持って、この数年進められていただいております。略歴につきましては、金澤課長のお話が優先ですので割愛させていただきますけれども、この資料の19ページ、黄色い部分の裏表紙にありますので、後ほどごらんください。

では、金澤課長、よろしくお願いいたします。

## 行政報告

### 「働く喜びを！世田谷区のとりくみ」

#### 金澤弘道（世田谷区保健福祉部 障害者地域生活課 課長）

（金澤課長） 世田谷区役所の障害者地域生活課長の金澤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

ご紹介の中にありました、略歴なんですけれども、今、資料をご覧くださいている方もいるかと思いますが、現在の仕事は障害者施設の運営や障害者就労を担当しています。その前は、障害者施設の整備ですとか、障害者計画を担当していました。

私は、昭和55年に世田谷区役所に福祉職として勤務しました。そこで、最初に配属されたところが福祉作業所でした。その時、まだ施設は開設されていませんでしたので、都から移管になった福祉作業所に実習に行きました。早目に行くともまだ施設が閉まっていて、待っている方がいました。その方とお話すると、非常に礼儀正しく、話も円滑にできるので、「この方は利用者なのかな？」と思いました。

実習が始まって、「あの方、とても障害も軽いようですが、なぜ就職してないんですか」と職員に質問すると、「しっ、就職の話をしてはいけない。彼は、就職に失敗して非常に傷ついている」と注意されました。

しかし、私は、本来、福祉作業所というのは障害者の就労を支援していく場なのではないか、という思いがありました。

新しい福祉作業所が開設し、職員で「就労支援を一生懸命やっつけよう」と話し合っ

ける方はそれほど多くありませんでした。障害者自立支援法の資料の中で、障害者施設から就職する方は約1%というデータがありましたが、そのような実態でした。ご本人やご家族の方が、「この福祉作業所で安定して働ければ、それがいいんだ」と就労に消極的だったり、「僕は就職したいんだ」という方でも、職員の方で「能力的に難しい」と判断してしまうこともあり

ました。その結果、2年に一人くらいのペースだったと思います。

その後、「福祉作業所にいた〇〇さんが、入所施設に入った」という話を聞くことがありました。その方は、最初にお話しした人とは別人ですが、障害は軽く、作業も問題なくできる方でした。

福祉作業所は、利用者にとって、わりと温かく、楽しく働ける環境でした。そういう中に長くいると、一般就労に挑戦するより、「ここに居たい」という思いが強くなります。それから5年、10年が経っていくと、一般就労することが難しくなります。さらに、20年、25年経って親御さんが亡くなったとき、今度は、地域で生活することも困難になってしまうことがあります。そして、一般就労しながらグループホームで暮らしていける、と思えた人が施設入所することもあるのです。

障害者に温かく接して無理をさせない、という支援が間違っていたとは言い切れないかもしれませんが、しかし、安易に「就職は難しい」という判断をしてその方の可能性の芽を摘んでいなかったか、また、就労支援について、十分な専門性があ

ったか。

本日は、私の反省も踏まえてお話ししたいと思います。

では、次のスライドをお願いします。

まず、就労・雇用制度の変遷を取り上げました。非常に時間が限られていますので、説明は手短にしたいと思います。

障害者雇用の法制度は、身体障害者の方から始まって知的障害者に広がり、さらに平成17年に精神障害者の方も対象になってきました。ただし、精神障害者の方は雇用率には算定されますが、雇用自体は義務化はされていません。この他に、障害者就労を促進するための特例子会社ですとか、トライアル雇用、ジョブコーチなどが制度化されています。

次、お願いします。

企業の社会的環境と意識の変化です。

ここには載せていませんが、1999年に日本航空が障害者雇用について株主代表訴訟を受けました。

障害者の法定雇用率を達成していないため、年間四、五千万の障害者雇用納付金を払っていたことに対して、会社に損害を与える行為であるとして、株主訴訟が提起されたのです。

今、食品偽装問題とか、企業の倫理が問われていますが、法令遵守という視点から、企業が障害者雇用を考える時代になってきたのではないのでしょうか。

また、先ほどの法制度のところにあった特例子会社ですが、先日、私も見学いたしました。そこで、幾つか驚いたところがありました。

一つは、比較的、障害の重い方が多いことです。代表の方は、「軽度の方だったら、特例子会社でなくても就職できる。特例子会社なので障害が比較的に重い方でも対応できるし、企業にとっても制度上のメリットがある」と話してくれました。実際、働いている方の障害程度は、福祉作業所とあまり変わらないように見えたのですが、職場の空気が違いました。私が福祉作業所にいた時は、ほのぼのと職員と利用者が話をしながら作業をやっていました。しかし、ここには「働く場だ」という、ピンと張り詰めた空気があるのです。

障害のある方は、環境が変わればその環境に順応し、能力を発揮していくことができるのです。

特例子会社でなくても、積極的に障害者雇用に取り組んでいる企業があります。昔は、障害者雇用というと、温情的な考え方だったと思いますが、少し前に、障害者の法定雇用率1.8%に対してユニクロは7.42%、という新聞記事がありました。多くの店舗で障害者が働いているわけですが、ユニクロでは、「障害者が入ることによって、社員のチームワークがよくなったり、収益の拡大になる」と積極的な捉え方をしているんです。

先ほどの特例子会社も同様に積極的な捉え方をしていました。ここは、デパートの特例子会社なんです。デパートの定型業務を集約し、まとめて知的障害者にやってもらった方が効率的だと話してくれました。「社員が接客業務のほかに、数少ない荷札処理等の作業をやってミスが出やすい。これらをまとめて、障害者にやってもらった方が効率的で良い」と言うのです。障害者雇用について、こういう積極的な考え方が出てきています。

次、お願いします。

ここからが本題です。世田谷区の障害者就労の特色を五つに整理しました。

次、お願いします。

ネットワーク図で説明したいと思います。世田谷区の特色の一つ目が、障害者の就労支援と生活支援を分けていることです。就労支援を専門に行う施設があり、一方で就職した障害者の生活支援を専門に行う施設もあります。

二つ目は、世田谷は、知的障害者の「すきっぷ」と精神障害者の「しごとねっと」という二つの就労支援センターがあり、ここが中核になって他の就労移行支援事業所と連携しながら、就労支援に取り組んでいます。

三つ目は、IT技能の習得をめざした新しい就労移行支援事業所を立ち上げています。

四つ目は、障害者就労を支援する施設が数多くあることです。区立の福祉作業所は、20年度に障害者自立支援法上の事業に移行しました。一般的に福祉作業所は、就労継続支援B型に事業移行するところが多いと思いますが、世田谷区では、多機能型で就労移行支援と就労継続支援B型の事業を行うことにしました。世田谷区は広いですから、各地域の方が、身近な就労移行支援事業所を利用できるようにし、特別支援学校を卒業した方は、まず、就労移行支援事業所で就労に挑戦していただきます。

五つ目は、就労支援のネットワークです。障害者就労は福祉的な施策だけでは進まないの、世田谷区障害者雇用促進協議会といって、商工会議所や青年会議所、特別支援学校、ハーローワーク等との連携による協議会を設けて、企業等に対して啓発活動などを行っています。

それでは、次お願いします。

主に知的障害者の方を対象にしている「すきっぷ」の就労支援の流れです。活動内容として、作業、生活活動、運動、パソコンがあります。

「すきっぷ」は、旧法では通所授産施設で、作業訓練の場を設けています。具体的には、クリーニングや印刷作業を行っていますが、そこで訓練を積んで、働く力をつけていきます。クリーニングとか印刷の専門技能の習得ではなく、働く姿勢や働くために必要な意欲を身につけることを目的としています。

生活活動では、働く上で必要なことを学びます。例えば、余暇活動、調理、キャッチセールからの身の守り方、福祉制度の活用、トラブルが発生した時の会社への連絡、身だしなみや面接の仕方などさまざまです。

「すきっぷ」では、利用者は職能評価をし、個別支援計画を立てます。日常生活技能、社会生活技能、社会生活における行動特徴から39項目を評価

し、利用者に説明して個別目標を立てます。

その後、個別支援会議でモニタリングを行います。本人と「すきっぷ」職員のほか、保健福祉課のワーカーや家族の方が参加します。

利用者が実習する際は、ジョブコーチとして施設職員が付きます。

企業に本採用になった後も、フォローをしていきます。ジョブコーチですが、本人に対する支援だけではなく、企業の方からの相談を受けて、障害者が働きやすい環境づくりをします。

この方は、こういう仕事ならできます、といった仕事の切り分けや作業工程の工夫、指示の出し方なども助言していきます。

なお、「すきっぷ」には、相談室があつて、通所者以外の支援も行っています。

次、お願いします。

これが「すきっぷ」の外観です。

次、お願いします。

これは、印刷作業です。区役所や小中学校の封筒などの印刷を行っています。

次、お願いします。

これは、区の特養ホームのシーツ洗濯をしているところです。

次、お願いします。

これは、生活学習として、「すきっぷ」から就職した先輩の職場訪問に行っているところです。ここは東京大学ですが、グループ就労という形で雇用していただきました。一人だと就職に不安があっても、仲間と一緒にだと安心して働ける方もいると思います。

先輩の働いている職場を実際に見学して、「次は自分が就職するんだ」という意欲を持ってもらいます。

次、お願いします。

厚生労働省で働いている方のジョブコーチです。ここでは、郵便物の発送や整理、入力作業などを行っています。

次、お願いします。

これが「すきっぷ」の就職実績です。「すきっぷ」が開設してちょうど10年になります、通所部門から152名、相談室から75名、合計227名の方が就職しています。

次、お願いします。

これは、「すきっぷ」の通所者が就職するまでの期間です。1年半と2年位のところに大きな山があり、2年以内の方が半数以上ですが、3年かかっている方もいます。就職経験者の方が比較的利用期間が短く、特別支援学校から入った方は利用期間が長めだと聞いています。

次、お願いします。

「すきっぷ」就職率ですが、約93%です。先ほど、国の統計では、施設からの就職率が約1%と申し上げたので、「えっ、本当に？」と思われるかもしれません。

就労できなかった方について所長に聞きましたら、「ほとんどが、すきっぷに通えなくなった人です」という答えで、通所できた方の多くは就労につながっているそうです。

世田谷区では、保護的就労と言いまして、区の外郭団体で障害者雇用をしておりますが、就職先の多くは一般企業です。

それから、就職継続率です。就職してから離職する場合もありますが、その後のフォローによって、就職している人も含めると約88%と高い数値になっています。

次、お願いします。

「すきっぷ」が、なぜ高い就職実績が上げているかということ、主に三つの理由があると思います。

まず、本人・家族の意識が就職に向かっていることです。資料にありますが、就職について、「I hope」ではなく「I will!」―「私は就職するんだ!」という考え方を持っています。

次に、「すきっぷ」の就労支援の専門性が高いことがあります。

それから、今、障害者雇用を取り巻く環境が良くなっていることがあると思います。

次に、主に精神障害者の方を対象にしている「しごとねっと」ですが、こちらは、訓練施設が併設されていません。

時間がないので、詳しくは、資料を見ていただきたいと思います。これは、企業からの相談が増加していることを示した図です。

次、お願いします。

企業で、精神障害者の方を雇用する際の不安や疑

問が例示してあります。

次、お願いします。

企業から、こういう質問があるんですね。企業が障害者の方を雇用する際の不安や疑問点について「しごとねっと」が対応していくことが、障害者の就労支援になっています。

次、お願いします。

世田谷区では、就労支援と生活支援が分かれているというお話をしましたが、これは就労障害者の生活支援を行っているクローバーの概要です。

クローバーでは、就労障害者に登録してもらい、様々な支援を行っています。相談内容としては、住まいのこと、仕事のこと、恋愛のこと、オレオレ詐欺に遭わないことなど、いろいろあります。

次、お願いします。

これは、働いて暮らしていく中で施設・作業所と会社の違いを比較したものです。

次、お願いします。

施設の家族の方とお話すると、「企業就労に取り組みたいけれど、施設を出ると福祉的な支援が受けられなくなる」「企業の中で孤立して、離職したら困る」という不安をよくお聞きします。世田谷区で、生活支援の基盤を独自に設けているのは、「就職しても公的な支援がなくなるわけではありません。障害者施設でなくても、働く障害者を支援していきます」ということです。こうした基盤が必要なのです。

では、次お願いします。

これは、三つ目の特色に挙げた新しい就労移行支援事業所です。

「さら就労塾@ぼれぼれ」という名前です。世田谷区では、毎年、ハローワーク渋谷と共催で障害者の就職面接会を開催しています。その際、企業の求人票を見ると、基礎的なパソコン技能を必要とするものがたくさんあります。

そこでパソコン技能の習得を目指し、身体、知的、精神の三障害を対象にした事業所を立ち上げました。

次、お願いします。

「さら就労塾@ぼれぼれ」の詳細は、資料で見ていただきたいのですが、これは、コース別のプログラムです。これまでの福祉作業所とは、かなり異な

った内容になっています。

実施コースは、基礎から専門までコースが分かれていて、技能習得するとさらに専門的なコースもあります。

利用者は、3障害の方が利用されていますが、精神障害者の方が多いです。

次、お願いします。

これは、身近な地域に就労支援の基盤を確保している、という資料です。

先ほど申しましたが、区立福祉作業所を障害者自立支援法の事業に移行する時に、多機能型で就労移行支援事業を立ち上げました。

「すきっぷ」は、就労支援のノウハウを10年に渡って蓄積してきましたが、ほかの福祉作業所は、就労支援のノウハウは十分ではありません。そこで、19年度は、障害者就労支援センター「すきっぷ」と「しごとねっと」を中心に、就労移行支援事業を行う施設の職員を対象に、職能評価やジョブコーチ等の就労支援の研修を繰り返し行いました。職員の就労支援に対する能力を高めた上で、20年4月から就労移行支援事業所を開設しました。

次、お願いします。

これは、就労支援のネットワークです。世田谷区障害者雇用促進協議会は、福祉サイドだけではなく、産業や教育、労働機関などと連携して障害者就労に取り組むために設立されました。

毎年、協議会の主催によるイベントを開催していますが、今年度は、実際に障害者を雇用している企業の担当者と障害者自身に話をしてもらいました。

また、ハローワーク渋谷から、障害者を雇用する企業に対する制度等を説明してもらい、区からは、区の就労障害者に対する支援策などを紹介しました。

このイベントの内容は、幹事会で話し合っていますが、昨年度は、障害者自立支援法の施行にともなう工賃アップが課題になっていましたので、福祉作業所の自主生産品のコンペ等を行いました。

次、お願いします。

これは、障害者の就職面接会です。ハローワーク渋谷と世田谷で共催して行っています。施設利用者だけではなく、広くお知らせして、さまざまな障害の方が参加されています。実績の数値が出ていますが、20年度も19年度と同じぐらいの参加者数でした。

次、お願いします。

最後に、写真を用意しました。これは、「すきっぷ」が、地域の大学をお借りして開催している新年会と永年勤続表彰式です。「すきっぷ」の利用者は、就職により随時に退所していきます。ですから、新年会・永年勤続表彰という形で、就職した人たちが一同に集まります。

次、お願いします。

永年勤続表彰というと、20年とか長期間をイメージされるかもしれませんが、1年、3年、5年という短期間に区切って、それぞれ壇上で表彰しています。

前回、表彰を受けた方の代表が、このような挨拶をされました。「私は、頑張って今の仕事を任せられるようになりました。今後は、さらに次の仕事ができるよう努力し、結婚もしたいと思います」

私は、最初に「この方は就職が難しいのでは」と安易に判断していなかったか、という私自身の反省を申し上げました。

障害者の方は「働きたい」「地域で暮らしていきたい」「自己実現したい」「自立したい」という様々な思いを持っています。

私は、「すきっぷ」から就職して新年会に集まる方々を見て、とてもいいなと思います。女性の方は、ちょうど成人式も重なるので、振り袖姿で仲間や職員と一緒に写真を撮ったりしています。皆さんは、「自分は社会の中で働いている」という、とても晴れがましく、自信に満ちた表情をしています。

私たちは、「就労にチャレンジしたい」という意欲を持つ方の思いが実現できるよう、支援をしていかなければいけないと思っています。

時間がまいりましたので、私のお話は、これで終わりにさせていただきます。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

(司会) 金澤課長、どうもありがとうございました。

短い時間しか用意できなかったですが、すきっぷの話を中心として、地域の機関を巻き込んだ取り組み、金澤課長がみずからパイロット的に動かれている企画のものの部分ですとか、仕組みづくりのご活動など、規模の大小はありますが、都内のどの区市町村にも力強く進めるためのエールも含めてお話ししていただいたと思います。

それでは、説明の内容につきまして、これも1名の方で申しわけありませんですが、ご質問ありましたらお手を挙げていただけますでしょうか。

よろしくお願いします。

(質問者) 平時であれば、温かい支援とか、すごく落ちついて聞いていただけるんですけども、今は経済危機で、毎日、新聞の見出しに大量解雇というのが飛び込んでくるんですけども、障害者の就職を取り巻く環境も、これから厳しくなっていくと思うんですが、この経済の回復に3年、5年かかるということも聞きますが、これから、そういうことに対して特別なことは何か考えてられるか。

それともう一つは、日本全体、少子高齢化に向かっていくんですけども、中高年の途中で解雇された方についての再就職というのを、特別に何か考えてらっしゃるとか、こういうふうにしているということがあれば、お聞かせ願いたいと思います。

(金澤課長) 大変難しい質問ですが、経済状況が厳しいことについては、障害者就労もありますし、施設運営の方でも、いろいろと影響があると思います。

その中で、行政としてどういう対応をしていくかを考えていかなければいけないんですが、現時点では、障害者の就労支援について新しい施策を用意できている訳ではありません。

先ほど申し上げたように、障害者就労については、法制度の整備や企業の意識により、進んできてはいますが、その動きが鈍化することもあるかもしれません。

福祉サイドとしては、まず、企業の求める人材をつくっていくとか、障害者が安心して就労に取り組める環境づくりを進めるなど、福祉施策で取り組める部分を工夫していきたいと思っています。

また、中高年の雇用問題になりますと、非常に難しいお話です。先ほど、「さら就労塾@ぼれぼれ」のお話をしましたが、開設後、1年しか経っていませんが、就職者が出ています。しかし、年齢の高い方の就職は非常に難しいということを聞いております。雇用条件で、年齢の問題はどうしても出てきますので、難しい課題だと考えています。

ちょっとお答えになっていないかもしれませんが、以上です。

(司会者) よろしいでしょうか。

課長の説明にもありましたとおり、雇用促進協議会も、産業界などと一緒にっております。また、今のご質問も含めて、東京都としても区市町村と手を携えて、気持ちを緩めることなく進めていきたい

と考えております。

本日、金澤課長から行政説明をいただきました。  
もう一度、盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

ご参加の皆さんには、本日の障害者福祉交流セミナーのご協力、本当にありがとうございます。

最後になりますが、お手元のアンケートを、ちょっときょうは机の席ではありませんけれども、書きづらいと思いますけれども、ぜひともご記入をお願いしたいと思います。お帰りの際に、受付のところの係員にお渡しいただければと思います。

本日は、どうもありがとうございました。お氣をつけてお帰りくださいませ。